

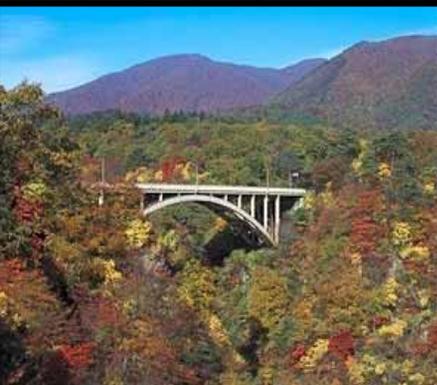


# 鳴子ダム水源地域ビジョン 第2回策定委員会資料



平成17年3月23日（水）

資料 - 2 「産業活性化」「交流と連携」のとりまとめ



# 鳴子町内外の主なうごき(交流・連携など)

## 体験交流型観光を考えるセミナー

(2005/2/7 鳴子町中央公民館)

木村宏施設総括支配人(財団法人飯山市振興公社)

- ・地域おこしは、意識おこしの事業
- ・地域の人の意識を起こさないと成り立たない
- ・一部で盛り上がってもしょうがない
- ・一生懸命メニューをこしらえてもリピーターは来ない
- ・体験は対話する時間
- ・どういう話をするか、地域をどれだけ自慢できるか
- ・地域の代表として案内できる、地域を好きな人でないとうまくいかない

## 大崎・最上・雄勝の地域おこしを考えるリレーシンポジウム

(2005/2/7 山形県最上総合支庁)

代表者トークより

- ・一般の人を巻き込まないと地域づくりはうまくいかない
- ・情報は末端まで流せば信頼関係も強くなる
- ・連携が重要
- ・圏域を越えてくる客の需要に応えきれないこともある
- ・何でも知っておかないと
- ・財政的に困窮。平日の対応面で会員増も望みにくいところがある

## 料理人、農家らネット設立 地産地消推進を

(2005/2/13 古川市内)

- ・食をテーマにした異業種交流。結成後は「鳴子町温泉文化研究会」と連携
- ・大崎地域の食材を使った目玉料理の開発などに取り組む
- ・地元の食材を生かすには、料理人が農家などと結びつきを強める
- ・各分野のプロが連携すれば地域おこしに
- ・結成の土台は1999 - 2002に10回行われた、郷土料理などを味わった鳴子町中央公民館の講座「鳴子美食倶楽部」

## 食と観光シンポジウム～大崎が託す新しい希望に向かって～

(2005/2/1 古川市内)

- ・「食と観光のコラボレーション」をテーマにした基調講演(志賀秀一氏:東北地域環境研究室代表)
- ・大崎市合併で広いパースペクティブでみてほしい
- ・流通は高齢化社会に対応したメカニズムにはなっていない。食に求められるようになった「安心・安全・ちょっとだけ」は追い風
- ・システムをつくるのはみなさん
- ・今あるものを大事にしないと地に足がついていかない

# 鳴子町の主なうごき(温泉療養プラン)

## 鳴子温泉と湯治文化

- ・1162年藤原氏によって鬼首が開湯
- ・18世紀前半には川渡大湯、赤湯御殿湯が仙台藩の御用湯
- ・1791年に林子平が川渡の湯につかり伊達藩主・夫人の来湯
- ・温泉は出湯と呼ばれ、金山下代記録(1799年)によれば、年間の湯治客数は、川渡8千人、滝の湯(鳴子)5千人、荒湯(鬼首)5千人
- ・脚気(かっけ)川渡、胆石田中、消湯(しょうかち)赤湯、疝気(せんき)車湯、瘡(かさ)鳴子と歌われるほどの経験的效果

## 温泉療養プランの成り立ち

- ・由緒ある湯治宿の存在
- ・病気・リハビリと入浴法についての問い合わせ
- ・病院内でも脳卒中リハビリ患者や整形外科患者が外来で温泉リハビリを施行し在宅に戻りたいという希望が多い
- ・鳴子町立温泉病院、町内開業医、観光協会で協議
- ・平成14年6月鳴子町観光協会定時総会で「温泉療養部会」を設立
- ・当初は8軒の旅館で実施
- ・その後23軒の旅館にひろがる

## 温泉療養プランとは

- ・23軒の温泉旅館と鳴子町立温泉病院が連携
- ・入院に至らないような湯治客 へ鳴子町立温泉病院への便宜を図るといもの(生活習慣病や腰痛、リウマチ性疾患、脳梗塞や交通事故のリハビリ)
- ・病院の予約は全て旅館側が引き受け、診療申込書と健康保険証を送って事前にカルテを作成
- ・病院では毎週水曜日の決まった時間に診療時間を設定
- ・通院の送迎は旅館側が行う
- ・院内の温泉を利用したりリハビリテーション棟で理学療法士や作業療法士によるリハビリ指導を受けられる。(会計は別途)
- ・健康保険対象外の脳ドックも受け付ける。
- ・利用者の内訳は(平成14年度)  
整形外科疾患46人 脳卒中後遺症42人 生活習慣病29人 その他4人
- ・湯治期間は5～30日間
- ・東北地方40人、関東地方78人、その他3人
- ・「温泉療養プラン」開始後は近隣在住者が多かったが、東京都をはじめとする関東地方、リピーターが増加している。

出典)鳴子町広報誌、宮城県医師会報

# 鳴子町の主なうごき(スリーライン・ツイン・ホットスプリングス)

## 概要

- ・宮城、山形両県を結ぶ三つの幹線道路の周辺にある温泉地を一体的に売り込む
- ・県境をまたぐ三つの観光ルートを設定し、広域温泉郷のイメージを売り込もうという試み
- ・相乗効果による集客力アップを狙う

## 三つのルート

- 国道47号(鳴子、赤倉温泉)
  - 国道48号(作並、天童温泉)
  - 蔵王エコーライン(遠刈田、青根、蔵王、上山温泉)
- 奥羽山脈を越えて車で一時間程度で移動できる

## 事業内容

仙台、山形両市を起終点に、三つの観光ルートと周辺の見どころや食べ物などを紹介する広域観光マップを作成  
計3回、観光産業や行政の関係者を対象としたシンポジウムを開く。(鳴子町でも開催)  
国土交通省直轄の地域連携支援ソフト事業に採択されており、両県で構成する「宮城・山形観光推進協議会」が主な実施主体となる。



# 鳴子町内の地域活動の取り組み(向田晃氏)

交流の達人(鳴子町内) (栗駒・船形リフレッシュオアシス21宮城県企画部)	
スポーツ交流	スキー教室 上野々スキー学校 校長 上野健夫
伝統歴史交流	かぶれない漆器塗り体験 及川漆器店 及川善和 こけし絵付け体験 こけしの秀雄 大沼秀顕 こけし絵付け体験 こけしの岡仁 岡崎靖男 こけし絵付け体験 こけしの桜井 桜井昭寛 こけし絵付け体験 こけしの菅原屋 菅原和平 こけし絵付け体験 松田工房 松田忠雄 こけし絵付け体験 岩下こけし資料館 遊佐妙子 こけしづくり体験 日本こけし館 つる細工体験 ペンションリトルウッド 小林達廣
産業体験交流	ブルーベリー摘み取り体験 鳴子町ブルーベリー生産加工組合 組合長 阿部誠志
その他の交流	国内外を問わない交流事業 石の梅まちづくり創造研究会 板垣幸寿
	雄大で豊かな自然の中でのさまざまな体験 リゾートパークオニコウベ 支配人 向田晃

## 向田晃氏(リゾートパークオニコウベ)

山菜採りは5月～6月、  
 ジャがいも掘りは7月中旬～8月上旬、  
 かぶと虫ふれあいの森  
 ・かぶと虫自然観察園  
 ・世界の昆虫展示館 7月下旬～8月下旬、  
 大根掘り体験は9月中旬～10月末、  
 そば打ち体験は4月下旬～11月上旬、  
 スキースクールは12月下旬から3月下旬まで

# 鳴子町内の地域活動の取り組み(後藤錦信氏)

## 鬼楽里ふるさと体験(2003年～)

鳴子町鬼首地区は高原野菜などの農林業と観光業が盛んな地域であり、その農業者と宿泊施設が連携し、グリーン・ツーリズム事業をスタートさせることになった。

農業者側は体験部門を担い、宿泊は既存の宿泊施設を利用する。それぞれが得意な分野を保管しあうことによって効率的な運営と斬新な企画が期待される。

本年はトウモロコシと大根の収穫体験と地域の伝統行事(文化)である神社のお祭り参加、自然景観散策を中心とした内容で、8月及び9月の2回実施することとなった。

今回の取り組みは直売を実践している農業者側からの要望があり、普及センターは町と連携して農業体験交流の事業掘り起こしから事例や運営に関する情報提供などの支援に携わってきた。

また、農業体験交流を取り組む鬼首農地開発農業振興組合(後藤錦信会長)は普及センターが3年前から地産地消を推進する重点課題の対象としてきた団体で、グリーン・ツーリズム事業について各地の事例紹介や視察を重ねることによって組合員の意識の高揚を誘導し、新たな地域農業活性化としてほしいに關心を強めた。本年は当事業の実現を目標にグリーン・ツーリズム部会を設置した。

今回の取り組みは初めての試みであり、鳴子町鬼首地区に農業体験交流事業を定着させるための試験的な実施と位置づけている。今回の実施をもとに体験交流者及び運営者の意見などを収集し、当地区における継続的な農業体験交流事業のあり方を模索することになる。

企画の主な内容は以下のとおり(2003年版)

1回目 期日:8月24日(日)～8月25日 1泊2日

宿泊先:国民宿舎 鬼首ロッジ

体験交流:トウモロコシの収穫、神社のお祭り参加、自然景観散策

募集人数:30人程度

2回目 期日:9月17日(水)～9月18日 1泊2日

宿泊先:国民宿舎 鬼首ロッジ

体験交流:大根の収穫、神社のお祭り参加、自然景観散策

募集人数:30人程度

## 大崎材利用ネットワーク

おおさき材を、森林所有者から消費者に至るまで円滑に流通させ、良質な地域材を使用した大崎地域の環境や自然条件に適合する住宅を提供。

大崎地域の木材の利用推進を図り、「地産地消」を推進・実践。

構造材に適した木のルーツを知り、「顔の見える」「健康で快適な」地域型家づくりを発信。

エンドユーザーへの情報の提供・講演会・現地検討会なども開催。



とうもろこしもぎ取り体験  
& 鬼首神楽見学



高原大根抜き取り体験  
& 大森馬樞神社まつり参加

## 山が旬の市

秋田との県境国道108号線沿いの鬼首中川原地区内に小さな直売所があります。開催日に出すのぼり・案内看板が目印です。直売所のまわりは、茅葺屋根の家・川・山があり、そこにはふるさとの原風景があります。主に販売する農産物は、みず・うど・うるい・あいこ...などなど盛りだくさんの旬の山菜・きのこ・高原大根・ブルーベリー・加工品(高原大根漬・こうじ南蛮みそ・ジャム他)・りんどうなどです。10月には収穫祭としてお客様感謝デーを行います。



また、地元の子供たちに地元の食材を届けようと、給食に地元食材の日を設け(毎週月曜日、木曜日)地産地消・食育の活動にも取り組んでおります。



生産者 鬼首農産物直売所「やまが旬の市」(会長:高橋 とみえ)  
開催時期 5月29日～11月7日までの毎週土曜日・日曜日  
土・日曜日と連続する祝日も開店。  
臨時に開催する日もあります。



# 鳴子町内の地域活動の取り組み(板垣幸寿氏)

## 石ノ梅まちづくり創造研究会(1993~)

1993年、「鳴子温泉」として名高い鳴子町の一角、石の梅地区に、地域づくりの会、「石の梅まちづくり創造研究会」が発足した。

石の梅地区に下水処理場建設の話が持ち上がったことが契機だった。リーダーの板垣幸寿さんは、旅館を経営し、米もつくる。温泉旅館経営者が地域運動に乗り出したという、企業と住民の2つの視点を合わせ持った活動が始まっている。

地域の「資源」は何かを考え、掘り起こし、観光地としてただ訪れてもらうのではなく、心がゆきかう町づくりをめざそうと会の活動は進む。

手はじめに休耕田を都会との交流の場にし、地元の人をインストラクターに蕎麦や米づくりをする。訪れた人たちと一緒に汗を流し収穫を祝う「小さな村の感謝祭」は、地域あげての秋祭りとなった。

また、稲刈りの終わった田を突き抜ける農道に、赤や黄色の旗をたて、風を視覚的にも感じることでできる新しい名所、「風の道」もつくり出している。

そのほか、独自の研究会「川渡・石の梅まちづくり小学校」の開校によって、活動がさらに充実しつつある。1995年に開講し、20歳代から80歳代の人たち約50人が、半年間、月一回の授業を重ねた。

専門家・著名人が教師になり、「まちなみ景観研究」「温泉研究」「住民活動研究」「農村食堂研究」にわかれて研究を進めた。いま、地元企業兼住民でもある人たちが中心になっての地域文化を興すグラウンドワーク活動に注目が集まっている。



「川渡・石の梅まちづくり小学校」入学式の日

## 休耕田で市民農園

宮城県鳴子町大口の温泉旅館「山ふところの宿みやま」館主で農家の板垣幸寿さん(49)が今年4月、旅館近くの休耕田を使って市民農園を開設する。政府の構造改革特区「鳴子温泉郷ツーリズム特区」の規制緩和策を活用し、遊休農地を生かす試み。湯治と市民農園を組み合わせ提供する珍しいケースで、2月に募集を始める。

休耕田は石ノ梅地区にある約1.6キロの農道で地元住民が名付けた「風の道」沿いにあり、面積は約2000平方メートル。一区画約100平方メートル(1万円)の畑を20区画用意し、オーナーを募る。

契約期間は今年4月から来年3月末までの1年間。オーナーは開墾から始め、野菜作りなどを楽しんでもらう。

地域の「資源」は何かを考え、掘り起こし、観光地としてただ訪れてもらうのではなく、心がゆきかう町づくりをめざそうと会の活動をおこなっています。休耕田を都会との交流の場にし、地元の人をインストラクターに蕎麦や米づくりをしたり、訪れた人たちと一緒に汗を流し収穫を祝う「小さな村の感謝祭」は、地域あげての秋祭りにもなりました。また、稲刈りの終わった田を突き抜ける農道に、赤や黄色の旗をたて、風を視覚的にも感じることでできる新しい名所、「風の道」もつくり出しています。

## なるこ未来創造会議

宮城県鳴子町鬼首の中川原地区にある山、通称「きつね森」のふもとに、地元住民が「山の神の石碑」を建立した。

きつね森では、町内の青年らのグループ「なるこ未来創造会議」が昔の山の暮らしを再現して都市と交流する計画を進めており、石碑には、住民らが交流に際し「自分たちを見守ってくれる豊かな自然へ感謝したい」との思いが込められている。

石碑は高さ約50センチ。中川原地区の石を材料に、同町の小島石材店が磨いて文字を彫った。地区に住むおけ職人金田孝一さん(73)がきつね森にある1本のクリの木から鳥居をこしらえた。12日に「芯(しん)入れ」と呼ばれる儀式があり、住民ら約30人が参加。神事に続いて、鬼首神楽保存会のメンバーが「神舞」を奉納した。

きつね森は標高四百数十メートルほどの里山。地元住民が周辺にある畑地や山林などの管理をしてきたが、次世代の担い手不足に悩んでいる。このため、創造会議を橋渡し役に、一帯を「きつね森王国」と名付け、地元住民が都市住民を招いて農林業や山の暮らしの体験を楽しんでもらう計画が持ち上がった。

石碑は、交流計画を進めるにあたり「自然を敬う気持ちを忘れないようにしよう」との声が住民から上がり、7月ごろから準備を進めてきた。町内会長の遠藤兼司さん(68)は「山の恵みを生かすために山の神の許可をもらいました」と話した。

小さいころよくきつね森で遊んだという創造会議事務局の大沼幸男さんは「住民の方々の前向きな気持ちがうれしい。ゆくゆくはきつね森の登山道なども用意したい」と張り切っている。



山の神の石碑

# 鳴子町内の最近のうごき(新聞記事より)

主なできごと	年月	場所	新聞掲載日	新聞
<b>鳴子町がツーリズム特区に</b>			2004年7月1日	河北新報社
SL D51が陸羽東線を走る「義経号」 9月18日～20日			2004年8月18日	仙北新聞社
鬼首にラジコンサーキット OPEN!		荒雄湖畔公園	2004年8月25日	仙北新聞社
サクマ式ドロップの絵に鳴子と縁の深い谷内六郎氏の作品			2004年9月1日	仙北新聞社
鳴子温泉響 LIVE TOWN NARUKO	2004年9月	鳴子小学校体育館		
鳴子町鬼首小3年生がソバ栽培 (こども農業体験学習推進事業)		鬼首基幹集落センター (収穫祭)	2004年10月27日	河北新報社
<b>大崎・最上・雄勝の地域おこし考える 新庄でリレーシンポジウム</b>			2004年10月31日	仙北新聞社
鳴子で初の相乗りタクシーを運行 (鳴子温泉郷の名所を案内)			2004年11月3日	河北新報社
鳴子小学校でタイムカプセル開封			2004年11月19日	河北新報社
<b>第2回全国グリーン・ツーリズムネットワーク みやぎ・鳴子大会開催</b>	2004年11月	鳴子町スポーツセンター	2004年11月22日	河北新報社
一店逸品運動研究会「でっぺクラブ」の 湯の香はがき			2004年11月25日	河北新報社
民謡チャリティーコンサート			2004年12月9日	河北新報社

# 鳴子町内の最近のうごき(新聞記事より)

主なできごと	年月	場所	新聞掲載日	新聞
鳴子・温泉客ら無農薬栽培体験			2004年12月9日	河北新報社
JR川渡温泉駅前広場にイルミネーションツリー			2004年12月14日	仙北新聞社
鬼首中学校の生徒が仙台市の県立盲学校を訪問			2004年12月17日	仙北新聞社
クリスマスランチをプレゼント(鳴子町社協)			2004年12月26日	仙北新聞社
鳴子塗で新春もちつき大会		鳴子早稲田棧敷湯前	2004年12月28日	河北新報社
新春祝賀会		鳴子町中央公民館	2005年1月6日	仙北新聞社
歌手高橋佳生さん「雪渡り」のトークライブ	2005年1月	仙台市内のライブハウス	2005年1月7日	仙北新聞社
小さなおひなさま展		こけしの菅原屋	2005年1月7日	河北新報社
鳴子町国際交流協会設立10年記念誌を発行	2005年1月		2005年1月8日	河北新報社
鳴子温泉神社の伝統行事「とろろ講」		鳴子温泉神社	2005年1月19日	仙北新聞社
新春湯の街演芸会	2005年1月	旅館ゆさや	2005年1月21日	仙北新聞社
<b>農業と湯治をミックス</b>	<b>2005年1月</b>	<b>鳴子町石ノ梅みやま</b>	<b>2005年1月27日</b>	<b>仙北新聞社</b>
鳴子峡など巡る散策路「日本の道500選」に	2005年1月		2005年2月3日	河北新報社
北朝鮮拉致被害者横田夫妻が講習会	2005年1月	仙庄館	2005年1月28日	仙北新聞社
歴史街道に「鳴子峡」を選定 (日本ウォーキング協会)	2005年1月		2005年1月30日	仙北新聞社
<b>鳴子で温泉文化見学会 医療と湯治の連携した「医者湯治」見学会</b>	<b>2005年1月</b>	<b>鳴子町内旅館</b>	<b>2005年1月31日</b>	<b>仙北新聞社</b>

# 鳴子町内の最近のうごき(新聞記事より)

主なできごと	年月	場所	新聞掲載日	新聞
ユースフェスティバルinおおさき2000 鳴子町青年会スマイルスがギター演奏	2005年1月	パレットおおさき(古川市)	2005年1月31日	仙北新聞社
食と観光シンポジウム ～大崎が託す新しい希望に向かって～	2005年2月	芙蓉閣(古川市)	2005年2月3日	河北新報社
温泉文化の担い手を応援 (若手芸者2人修業の節目でお披露目)			2005年2月3日	河北新報社
鳴子ダム水源地域ビジョン策定委員会	2005年1月	鳴子町内ホテル	2005年2月4日	河北新報社
東北チェアスキークラブ講習会	2005年1月	オニコウベスキー場	2005年2月4日	河北新報社
鳴子町南野際の青年・壮年グループが雪かき支援	2005年2月	鳴子町南野際	2005年2月7日	河北新報社
<b>体験交流型観光をテーマにしたセミナーが開催</b> 宮城県古川地方振興事務所 鳴子ツーリズム研究会 交流人口拡大事業「Visitなるこ」		<b>鳴子町中央公民館</b>	2005年2月9日	<b>仙北新聞社</b>
おおさき地域新春交流大会 料理人と農家がネット設立地産地消の拡大を図る 鳴子町温泉文化研究会と連携	2005年2月	グランド平成(古川市)	2005年2月10日	河北新報社
鬼首でスノーフェスティバル	2005年2月	リゾートパークオニコウベ	2005年2月10日	仙北新聞社
「雪渡り」の心伝える高橋佳生のミニライブ	2005年2月	鳴子町内旅館など	2005年2月15日	仙北新聞社
ロック歌手「ムーンライダーズかしぶち哲朗」ライブ	2005年2月	鳴子町石ノ梅みやま	2005年2月16日	仙北新聞社

# 鳴子町内の最近のうごき(新聞記事より)

主なできごと	年月	場所	新聞掲載日	新聞
地酒「雪渡り」発表会	2005年2月		2005年2月19日	河北新報社
新酒「雪渡り」蔵出し発表会	2005年2月	川渡温泉	2005年2月19日	仙北新聞社
スノーランタンin南原	2005年2月	鳴子町南原	2005年2月22日	仙北新聞社
スローライフ週間「湯っけり湯ったり湯たかに ～2005冬	2005年2月	鳴子温泉郷ツーリズム特区	2005年2月22日	仙北新聞社
<b>鳴子に新逸品7種</b> 空店舗を活用し街並みの温泉ミュージアム化 鬼首の山わさびを使った「くずもち」と「みそ」 キノコ、山菜を入れた菓子「山の幸湯コロシ」 花を生かした暮らしのヒントを毎月発信する情報誌 酉年にちなむ鶏をかたどった創作こけし フィリピン特産の芋・ウベを使った「アンさんの豆乳 UBEクッキー」 木で作ったのれん 鳴子の自然の写真を使った絵はがき	2005年2月	ほっとサロン	2005年2月23日	河北新報社
第14回みちのく鳴子寄席	2005年3月	鳴子町中央公民館大ホール		





温泉文化をいっしょに温泉療養プラン

今回は町立鳴子温泉病院がかかわっている、鳴子温泉の湯治文化にかかわる地域住民と病院職員、特にリハスタッフとの共同作業による温泉療養プランについてお知らせします。

鳴子温泉と湯治文化

鳴子温泉は文献的には1082年の頃、平泉の藤原氏によって鬼首が開湯、16世紀前半には川邊大満、赤澤御殿3人が仙臺の御用湯となり、寛政3年(1791年)に林子平が川邊の湯につかたのを皮切りに、文久3年(1863年)には伊達藩邦(13代)夫人が赤湯へと、藩主ならびに藩王夫人の来湯がたびたびありました。

当時「温泉は一龍曰く出湯」と呼ばれ、多くは湯治を目的に利用されました。興修する金山下代邸跡(寛政11年版)によれば、年間湯治客数は川邊が8千人、滝の湯(鳴子)5千人、荒湯(鬼首)5千人とあったといいます。

また、昔から「さつけ湯」の川邊、ななせ(湯石)田中、しょうかち(湯池)赤湯、せんき(福町)湯湯がさ(湯)鳴子と歌われるほど経験的効果があったとされています。

※鳴子町史上巻より抜粋

温泉療養プランの成り立ち

湯治客を中心とする宿屋側は、足

腰の病に苦しむ多くのお客様方におえられてきた由緒ある湯治場で、当然のように、病氣やリハビリテーションなどは入浴法について問い合われがた多く、また病院外でも腕平やリハ患者さんや整形外科疾患で悩んでいる患者さん、外來で温泉リハを施行し、在宅に戻りたいという希望者が多く、当院とご町内・開業医の先生方と観光協会と話し合いが持たれ、次の温泉療養プランができました。

その後、平成14年6月鳴子町観光協会定時総会で温泉療養部会設立を宣言し、当初は8軒の旅籠でスタート。会議、勉強会、視察を重ね、平成14年12月に町内全旅籠に参加呼びかけの説明会を開催しました。

その結果21軒の旅籠が参入し、その後2軒の旅籠も新たに参加しました。

温泉療養プランとは

温泉療養部会が一致団結し、町立鳴子温泉病院と連携した「温泉療養プラン」これは23軒の協力旅籠が入院には至らないような生活習慣

病や腰痛、リウマチ性疾患、脳梗塞や交通事故の後遺症のリハビリテーションなどを希望するお客様に対し、鳴子温泉病院への通院の便宜を図るといふもので、健康保険対象外の腕のトックも受け付けます。

病院の予約はすべて旅籠側が引き受け、診療申込書と健康保険証を返して、事前にカルテを作成しておいてもらいます。病院ではプラン利用者のため、毎週水曜日を決まった時間を診療にあててあり、遠征のための送迎は旅籠が行う。待ち時間はなく、余裕を持ってゆくと、診察が受けられるシステムです。

また、月曜日から全曜日、院内の温泉を利用したり、リハビリテーション棟で、理学療法士や作業療法士により、リハビリテーション指導を受けることができます。(病家の会計は別途支払い)

現在までの療養プランの利用者は121人で、その内訳は整形外科

まとめ

今年の第8回日本温泉気候物理医学会・総会では「温泉を科学する」のテーマのもと群馬県津町で開催され、EBMによる温泉効果の発表がいくつかなされました。

医学的温泉療法における科学的分析も進んでいることが印象づけられました。

また、さらにその先にある「Wellnessウェルネス」の理念について、話し合いが持たれようとしています。

そのような中において、温泉を中心とした鳴子町が目指す理想郷への第一歩のパスポートは、歴史ある鳴子温泉の湯治の文化と最新のリハビリテーション療法の共同作業です。

※群馬県医師会報に掲載したものです。

町立鳴子温泉病院  
院長 成川 弘 治



広がる特区

東北の新プロジェクト

広がる特区

10元

取得要件を緩和  
都市住民などに温泉や観光のみならず、農業体験、ナスなどの栽培に当てる。自慢の温泉の生育ぶり

遠藤久夫さん(左)は規則緩和による新規就農者の第一号。農地法で五十坪以上となっている農地取得の要件が特区認定で緩和され、十坪から取得できる。自宅に近い約十五坪の農地を七月に町民から借り、大根やネギ、ピーマンなどを育てる。

農村生活通して交流

鳴子温泉郷ツーリズム特区

空間を増やしたい。を毎朝見るのがうれしい。山村の暮らしぶりを再現今年六月に認定された鳴子温泉郷ツーリズム特区。作った農作物を家族や友人と製造では十一月の免許にはそんな願いが込められている。規制緩和、夢、特区の魅力をさらに「ツーリズム」建設が始まる。市民農園の開墾と、権限と心づく製造の二つだ。

遊休農地解消へ

鳴子町には国内の天然温泉の泉質十一種類のうち九種類がそろっている。町外の人にも対象で、七、鬼の地域の標高五百

宿泊客増も狙う

町内では市民農園(湯こけし)も高い。た。宿泊客増も狙う。現状に危機感を抱いた。町は農的温泉空間を生

鳴子温泉郷ツーリズム特区 市民農園の開墾は農地法で市町村と農協に限られるが、町と認定を結ぶことで条件に農協所有地も認め、農家民営農地レストランなどを営む補作業が免許を取得すれば、生産量がかかわり、自ら生産したナスを使ってとろろを製造できる。

万人から二〇〇二年に観光、農林、産業などの関係者が足元の資源を生かした取り組み方を入、町も〇〇年度にツーリズムの講座を開催。今年四月には受講者が

の交流人口増を見込む。関係者は「観光、農林、産業などの農村地域交流人口を二千、観光業と各分野の〇〇三年度」から五千、資源を一体的に提供で人(〇八年度)に、宿泊されれば鳴子ならではの魅力を数倍同く七十八万人、力が生まれる。心のなか九十七万人に増やす。交流を重視した取り組み目標に掲げている。

町観光農林課の女部長



畑仕事に精を出す遠藤さん。町が目指すのは、都市住民や観光客も気軽に農的交流を楽しめる場の拡大だ。宮城県鳴子町大口

# 宮城県内の川を交流のフィールドとしているNPOなど

## 選・みやぎの現場～いきいき民間活動'02～ 「市民の川づくり」

名称	特定非営利活動法人 ひたかみ水の里	特定非営利活動法人 水環境ネット東北	特定非営利活動法人 広瀬川の清流を守る会
代表者の氏名	新井 偉夫	新川 達郎	日下 均
主たる事務所の所在地	石巻市中里六丁目1番5号 :0225-96-2026	仙台市青葉区一番町一丁目15番19号 :022-723-1390	仙台市太白区長町1丁目7-32 :022-247-6522
定款に記載された目的	次世代への命の継承の根源をなす水循環を可能にする、新たなライフスタイルの創造と実践を目指し、水循環の最小単位としての流域環境の保全、改善等を通して、水循環と人の暮らしが共生できる流域連携社会の形成に寄与することを目的とする。	水環境に関わる幅広い市民(「産・官・学・野」)の交流を通して、水環境の保全と創造を図り、持続可能な社会の形成に資することを目的とする。	一級河川広瀬川及びその支派川の水環境並びに周辺自然環境の向上を図り、住み良いまちづくりとともに市民の生涯学習、子供の健全な育成の推進に寄与することを目的とする。
特筆すべき活動	子供達の河川環境への親しみを深めるため「めだかっこクラブ」を結成、「かわの学校」(カヌー遊び、魚捕り、植物採集、河川清掃等)を開催しており、その自然体験が評価され、ふるさとづくり2001(集団の部)ふるさとづくり振興奨励賞を受賞している。 この他にも、子どもサミットや北上川健康診断、環境人材育成(リバーマスターズスクール)の開催・支援等様々な活動を通じて、地域づくりや川の美化運動等の普及に努めている。地域の小学校へ総合学習支援として北上川体験を行っているほか、子ども会活動を応援している。 石井閘門の操作・管理	水環境に関する情報交換及び交流会の開催 地域水環境づくりに関する調査研究や提案活動 水環境に関する活動への支援や協力 水環境に関する調査研究、交流活動、イベント等の受託及び委託 その他、水環境の保全と創造に関する活動 「東北水環境交流会」 「水環境研究」 「広瀬川1万人委員会」開催 「東北の「川」ワークショップの共催」	「広瀬川なんでも相談室」開催 「ホタルの里づくり」(ピオトーブ) ホームページ「今日の広瀬川」 「広瀬川公開講座」など定期講座 「広瀬川通信」(季刊誌)
申請受理年月日	平成11年5月6日	平成11年7月1日	平成13年1月31日
設立認証年月日	平成11年7月15日	平成11年9月29日	平成13年4月11日

# 宮城県内の川を交流のフィールドとしているNPOなど

名称	特定非営利活動法人 蕪栗ぬまっこらぶ	野蒜築港ファンクラブ
代表者の氏名	千葉 俊朗	佐藤 明嘉
主たる事務所の所在地	遠田郡田尻町蕪栗字舞岳51番地 :0229-38-1185	桃生郡鳴瀬町新東名2-6-8 :0225-88-3833
定款に記載された目的	多様な生物相と湿地の原風景が保全されている蕪栗沼の保全と自然と人間との共生関係の模索に関する事業を行い自然と人間とが共生した豊かな社会の構築に寄与することを目的とする。	野蒜築港、貞山運河に関する生涯学習の啓発、講演会等の開催、小学校と連携した総合的な学習への支援
特筆すべき活動	鳥類をはじめとした蕪栗沼の生物相調査や蕪栗沼の自然と農業、及び治水との共生を目指した活動について地域を巻き込んで行っているほか、蕪栗沼と水田を活用し、沼に生息するカエル類、トンボ類、湿地性ガ類等を題材とした環境教育活動にも取り組むなど、町内の小中学校の総合学習の場としても定着している。 シンポジウム「探検隊」年1回開催 ぬまっこ基金の運営	小学校総合学習への取り組み 「川・港・子どもサミット」 「明治三大築港交流会」開催
申請受理年月日	平成12年7月31日	-
設立認証年月日	平成12年10月5日	平成12年2月

# 宮城県内の川を交流のフィールドとしているNPOなど

名称	特定非営利活動法人 北上川の緑と水環境保全研究会	特定非営利活動法人 北上川・水の輝き
代表者の氏名	佐藤 治	畑山 敏郎
主たる事務所の所在地	登米郡豊里町竹ノ沢10番地の1 :0225-76-5188	宮城県石巻市中瀬5番13号 :0225-23-9180
定款に記載された目的	農業が水環境に果たす役割と環境問題を幅広い市民(産、学、官、民)との連携により研究し合い北上川流域の緑ある川辺と健全な水環境資源保全の形成に一翼を担うべく寄与することを目的とする。	北上川近隣住民に対し、北上川の環境と川文化の教育に関する事業を行い、水辺環境の保全・整備・教育・地域活性化に寄与することを目的とする。
申請受理年月日	平成16年4月27日	平成16年6月25日
設立認証年月日	平成16年7月12日	平成16年9月3日

## 選・みやぎの現場~いきいき民間活動'03~

団体、企業、個人等(以下団体等という。)の特筆すべき活動に着目し選考した。具体的には、下記の選考基準により選考した。

民間活動であること

全国的または県内でもユニーク・先進的な取組・活動をしていること

全国または県民に知ってもらいたい自らの圏域における成功例や誇れる事例であること

短期的・一過性のものではなく、長期的視野に基づく取組・活動であること

## 選・みやぎの現場~選考現場(23部門)~

1. みやぎ わたしたちの火の用心 6現場
2. 地域(まち)の未来仕掛け人たち 33現場
3. 外国人留学生の精神的な支えとなっているボランティア団体 6現場
4. 男女共生きいきワーキング推進事業所 7現場
5. バリアフリーに関連するユニークな活動 5現場
6. ユニットケア(特別養護老人ホーム) 5現場
7. みやぎ子どもの健全育成 5現場
8. 食材王国みやぎの応援団 6現場
9. 安心・安全な食品作りに取り組む工場 5現場
10. みやぎの先進的農業法人 10現場
11. 農林水産業活性化 6現場
12. 障害者を積極的に雇用している事業所 7現場
13. 元気な商店街づくり(地域商業の活性化) 11現場
14. 先進的販売活動を展開する漁業者団体 4現場
15. キラリと光る「スマイルあったか宮城」の観光10選(実践) 10現場
16. マーケットイン型農業にチャレンジする地域農業者グループ 9現場
17. 学校給食への地域農産物利用 5現場
18. みやぎの農村環境づくり 10現場
19. 人と環境にやさしい木のすまいづくり推進団体 7現場
20. 森林(もり)を支える団体 5現場
21. 新たな水産増養殖と資源保護への挑戦 6現場
22. みやぎの道路ボランティア 28現場
23. さわやか生涯学習 6現場

## 江合川流域の主な現場

### 地域(まち)の未来仕掛け人たち

NPOひたかみ水の里(石巻市)  
石巻を考える女性の会(石巻市)  
NPO蕪栗ぬまっこらぶ(田尻町)  
人形劇サークルころころ(古川市)  
21石会(石巻市)  
ひよっこりひょうたん田代島(石巻市)

### みやぎの先進的農業法人

いちごらんど石巻(石巻市)

### 農林水産業活性化

精進料理の会(小牛田町)

### 元気な商店街づくり

街づくりまんぼう(石巻市)  
四季彩通り商店街振興組合(古川市)  
台町ティー・エム・シー株式会社(古川市)  
でっぺクラブ(鳴子町)

### キラリと光る「スマイルあったか宮城」

鳴子温泉観光協会・鳴子温泉旅館組合  
(街を歩けば下駄も鳴子)(鳴子町)  
鳴子町観光協会温泉療養部会(温泉療養プラン)

分類	主な活動
2. 地域(まち)の未来仕掛け人たち	<p>食の文化祭(加美町)                      グリーン・ツーリズム体験 校舎の宿 さんさん館を経営(志津川町)                      齋理幻夜, コンサート, ふるさとメッセージ展(丸森町)                      地域通貨を単位に地域の支えあいとして取引・交流・人材育成(登米町・津山町)                      屋号看板普及事業, 木材利用促進事業(七ヶ宿町)                      「こども土曜塾」を通して, 圏域の子どもたちに地域の産業や特性などを理解してもらう(石巻市)                      古紙持参者と一緒に分別作業・生ゴミのEM堆肥化促進・壊れた傘で作ったエコバッグを使っの買い物推進・                      廃食油再利用のエコせっけん普及による阿武隈川の浄化運動等(角田市)                      「北上川さくらクルージング」を開催。また, 北上川のごみ拾いや流木片付け, 炭化への準備を行うとともに研修                      交流会を行う「北上川清流を取り戻す清掃活動」(登米町)                      史跡・名跡の案内標柱を会員手づくりで設置(大和町)                      炭焼き体験の開催や置炭活動による水源地の保全と啓発(七ヶ宿町)                      『神輿』, 『スノーモビル』等のイベントを開催, 協力し, 町内外の賛同者を巻き込みながら形にとらわれない活動                      を展開(栗駒町)</p>
10. みやぎの先進的農業法人	<p>米は減農薬・減化学肥料栽培による宅配やデパート等への直接販売, ニンジンが関東地区のスーパーとの契約                      栽培。枝豆も契約栽培による有利販売(米山町)                      知人の贈答依頼の対応から始まったコマ宅配(桃生町)                      畜産公害の未然防止と糞尿再資源化に取組み, 地域の稲作農家・園芸農家への供給(岩沼市)                      地元小学校から高校までの総合学習における視察を積極的に受け入れ, 食に関する教育に貢献(石巻市)</p>
11. 農林水産業活性化	<p>「試験林を活用した林業生産技術の向上」や「異業種との交流」, 「木を生かした町づくりの推進」などに取り組ん                      でいる。また, 木材の需要拡大を図るために地元間伐材を有効利用したログハウスを製作・商品化等(津山町)                      伝承料理研究, 小中学生や市民への農業体験学習の指導活動, 料理講習(名取市)                      地域の活性化と新たな食文化創造(小牛田町)                      自家生産物と地域の食材を活かした料理を提供。県内はもとより東京や国外からも客が訪れ, 食農教育・グリー                      ンツーリズム(都市と農村の交流)の拠点(加美町)                      農漁家レストランを開業, 民宿も開業し, ブルーツーリズム(都市と漁村の交流)の拠点(河北町)</p>
13. 元気な商店街づくり(地域商業の活性化)	<p>商店街で一店逸品運動を展開, 空き店舗を利用した休憩所「ほっとサロン」の運営一店逸品運動の一年間の集                      大成として「ほっとフェア」を開催湯の香はがき」の体験コーナーをほっとサロンで開催(鳴子町)</p>

分類	主な活動
15. キラリと光る「スマイルあったか宮城」の観光10選(実践)	湯めぐりチケットを発売し、宮城大学学生のアイデアを生かし、協賛店の割引サービス等を導入。JRやJTBとも一体的な誘客キャンペーンを展開(鳴子町) 鳴子温泉ならではの豊富な泉質により、多様な症状に対応できる可能性がある。治療効果が出ない場合は旅館同士の連携を図り宿の交換も可能としている。福祉医療と温泉観光が一体となった先進的な取組が注目される(鳴子町)
16. マーケットイン型農業にチャレンジする地域農業者グループ	エコファーマーを申請し、部会員45名が認定された。新規栽培者は随時エコファーマーの認定を受け、全員がエコファーマーである。 エコファーマー認定をきっかけに、マルハナバチやミツバチ導入等による「人と環境に優しいなす栽培」の確立を図る。(古川市)
17. 学校給食への地域農産物利用	PTAや農協青年部がメンバーとなり、学校からの要望に沿った食材供給(古川市)
18. みやぎの農村環境づくり	伝統的農業施設や美しい農村景観等を復元・整備(山元町・亘理町) 機織沼への景観作物の植栽やホタル観察路、親水路などの周辺環境の整備。地域の自然環境を学習しつつみんなで「ふるさと」を守り育てる活動(東和町) 農村景観づくりとして植栽を行った。また、子どもたちと農業用水路の水質浄化に取り組むとともに、魚つかみを通して水と関わる機会を設け、地域の環境を考えるための体験学習を実施(七ヶ宿町) 小学校・保育園と連携した減農薬による農業体験学習(矢本町) 環境保全型農業に先駆的に取り組み、環境保全技術を開発・実践するほか、消費者や子どもたちに対する体験活動の提供等を通して、安全な食料と環境保全の大切さの理解促進(田尻町) 「たんぼの学校」を開催しながら、地域住民の生態系への意識を向上させ、ワークショップを通じた集落点検を実施(迫町)
21. 新たな水産増養殖と資源保護への挑戦	内水面の河川・湖沼に放流された稚魚は、人工ふ化による高コストと、「餌付けされた稚魚はヒレの形も違い、人の気配にも鈍感」なため、コスト削減と天然に近い魚の生産をねらって、県内では初めての「卵埋設放流」に取り組んでいる。(鳴子町)

# 国内の事例

交流と連携によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>北の星座共和国 &lt;北の星座共和国、建国推進事務局&gt; :01655-4-2595</p>	<p>道北の活性化を考える「北の遊星人たち」から、「星座」をキーワードとした広域振興が提案され、それが「北の星座共和国構想」であり、道北に位置する50市町村をトータルでデザインして行おうとするものである。</p>	<p>「北の星座共和国」建国推進事務局は、30市町村に世話役としての窓口を依頼。事業における地域連携や情報の受発信ができる仕組みづくりをスタートさせた。北 北海道の広域連携によるシンポジウムや会議を「スタンザム」と呼称し、意識づけに努力した。そのほか、 「北の星座共和国」写真コンテスト 移住定住マニュアル読本 道北一日散歩切符 北 北海道観光マーケティングリサーチ インターネット普及事業 遊星人クラブ会員募集 グルメの散歩道パスポートなどを実施。</p>	<p>人的なつながりが広がり、多くの人たちの出会いの場所ができた。 ビジネスチャンスとして、いろいろな商品開発が行われ、地域経済波及効果に寄与している。 「道の駅」に星座の名前が命名された。 イベントなどに北の星座共和国のシンボルを使用。 玄関マットに星座イメージが取り上げられた。 「写真コンテスト」の事業は、毎年200点を超える応募があり、コンテストの知名度が上がってきた。 写真コンテストの入賞作品を展示回覧して地域交流を促進。</p>	<p>事業を行う上での資金調達 人的なネットワークやスポンサーなどの協力がクリア。 活動のメンバーの高齢化 個人だけに頼らず、企業などの参加を募って事業展開を図っていく。 事業のマンネリ化 新たな発想と新たな人材に対応。 官庁との協力体制について課題が残る。 時間を掛けて啓発していく必要がある。</p>	<p>地域間の連携を密にすることが大切になってくる。 本業として行うスタッフとボランティアで活動するスタッフのそれぞれの役割を明確化。 イベント、ビジネス、知名度アップなど、しっかりと企画と運営が大切である。 事業に携わるスタッフが、共有できる情報を提供して行くために、事務局サイドのレベルアップが急務。 個人の優れた能力や企業・官庁が抱えている人材や情報、そして資金などを上手く活用して、広域のメリットを最大限にアピールすることが必要。</p>
<p>環十和田プラネット 広域交流圏推進事業 &lt;環十和田プラネット広域交流圏推進協議会&gt; :0177-34-1111</p>	<p>高速交通網の整備により十和田湖を中心として北東北地域が広域交流を図っていくための条件が飛躍的に整いつつあり、これらの条件を活かした圏域形成の潜在性が高まった。そして、平成7年9月に東北経済連合会が提唱した「環十和田プラネット構想」の考え方を基本とし、地域が主体となり、魅力ある地域づくりを推進する一方で、各地域がその機能を補完し合う形で連携を図り、新しい広域交流圏の形成を目指すために、平成9年2月、74市町村、24民間団体により本協議会が設立された。</p>	<p>&lt;環十和田プラネットビジョン&gt; 地域連携に関する調査事業の推進 十和田湖を囲む環状高速道路網の整備 十和田湖へのアクセス道路と周遊道路の改良整備 十和田八幡平国立公園への冬季通行の確保 東北新幹線の早期完成と在来線の確保 十和田湖・奥入瀬地域自然公園核心理域総合整備事業(緑のダイヤモンド計画)と周辺地域の整備事業の促進 埋蔵文化財発掘調査の支援制度の充実 縄文研究センターの設置</p>	<p>観光マップの作成 観光イベントの実施 ホームページでのイベントの紹介 など考え々と事業の推進を図っているところである。</p>	<p>今後も情報発信の強化・充実を図り、圏域のPRに努めるとともに、本圏域の交流・連携を促進する諸プロジェクトをいかに具体化させていくかが課題となっている。</p>	<p>環状地域の連携を強化し、都市間の人的・物的交流を一層活発化し、ひいては地域経済活性化の起爆剤として期待できるものと考えに基づいて、「北東北3県における新しい広域交流圏形成に関する要望書」を国土庁に提出している。 人的交流や物的交流をより活発にするばかりでなく、観光面や学術研究機能等の面での連携による産業の発展も期待 その基盤となる高速交通体系の整備が重要</p>
<p>越前・加賀みずとい で湯の文化連邦 &lt;越前・加賀みずといで湯の文化連邦推進協議会&gt; :0761-72-7830</p>	<p>恵まれた自然資源、温泉資源を活用し、広域的な取り組みによる地域の活性化をめざして、「交流」をキーワードとした「越前・加賀みずといで湯の文化連邦推進プラン」を策定し、これまでの「観光」という概念にとらわれない、住民と観光客が一体になれる新しい地域づくりをめざし、交流と連携によるソフト事業を展開している。</p>	<p>事業内容が多岐にわたるため、幹事会(総括)と8つの部会(事業ごと)を設置して事業運営にあたっている。 (平成11年度の主な事業) サミット :テーマ「人と環境にやさしい街づくりによる地域連携」 インターネット :プレゼントクイズ、観光・イベント情報発信 広域パンフレット :32,000部発行(高速SA、道の駅に配置) 旅行雑誌掲載 :全国版旅行誌に特集記事と広告を掲載 広報紙発行 :地域内全世界に配付(年2回発行) 見て歩き、食べ歩きパス :住民交流の日帰りバスツアー</p>	<p>各自治体間における連携意識の醸成。 インターネットによる情報発信事業による地域イメージアップ向上が確認。 あらゆる媒体を通じて情報発信を繰り返すことで、他の地域との差別化を図り、新たな「交流」が生み出されることを期待。 バスツアーには毎回、多数の住民の応募があり、文化連邦に対する理解も進んできている。</p>	<p>事業の推進が自治体主導であり、まだまだ「観光客」と「住民」の交流というレベルには達していない。 民間レベルの連携が進んでいないため、多様な自然や文化資源に触れることなく観光客が帰っていく。 今後は推進協議会が中心となって観光団体や経済団体などに参加を呼びかけるなど地域が一体となった取り組みが必要である。 事業費に対する負担金の拠出は各自治体の一般財源で賄われており負担増となっている。 大規模な事業を企画する際には、関係機関の協力が不可欠である。交流基盤となる地域ネットワーク道路の整備についても、国や県との密接な連携が必要である。(平成10年度にキャッチコピーを全国募集し、ロゴマークを作成)</p>	<p>歴史や地理的な「縁」を大切に、新たな資源の発掘とネットワーク化を進め、より魅力的な地域づくりをししていく。 住んでいる地域に誇りを持ち、その良さを再認識できるよう、多くの住民が参加できる新たな事業を展開する。 民間団体によるネットワークづくりが始まり、文化連邦以外の地域からも参加を得ながら、本当の「交流」を実現する。 各種の事業も定着しつつあり、その効果を十分に検証しながら地域の活性化につながるあらゆる連携を支援していく。</p>

# 国内の事例

交流と連携によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>北上川流域連携交流会 (東北公営企業管内 :019-659-3088) (北上川センター・盛岡内 :019-621-8551)</p>	<p>北上川は、上流の盛岡市から花巻市、北上市、水沢市、一関市、河口の石巻市まで中規模の都市が川沿いに点在しており、藤原文化を築いた平泉など、北上川を軸に特色ある地域で構成され、各地では様々な地域活動が展開されている。94年7月、岩手県東和町で「全国ダム地域交流フェスティバルin田瀬湖」が開かれ、その中のフォーラムにおいて、北上川流域各地の地域活動家が集まり、川を軸とした流域づくりの大切さが話し合われた。これがきっかけとなり、その後、様々な分野の人たちが加わりながら、数回にわたり「北上川流域フォーラム」など流域づくりについて話し合いが続き、市町村の枠を越えた交流・連携の必要性、ネットワークと人づくり及び川や自然体験の大切さなどが共通の認識となり、約1年間の検討を踏まえて、95年9月に北上川流域連携交流会が発足した。</p>	<p>自然の単位である流域をベースに「産・官・学・民」の交流や連携を通して流域文化の創造を目指して発足。 人を知ること、情報交換をすること、人材を養成することなどを柱に、名簿づくりやシンポジウム等の開催、ニュースレターの発行、川の学校(リバーマスターズスクール)の開校などをメインとしてスタート。 代表世話人は3人(上流、中流、下流)、事務局長3人、事務局員、世話人、アドバイザー、オブザーバーなど幅広い分野の人で構成。 会員は現在約200名、緩やかで弾力的な組織運営を心がける。「産・官・学・民」の連携・交流の形成のための支援及び調整を主目的としており、行政が入りやすい組織として、私的、公的活動の枠の中間的活動を志向。</p>	<p>発足して4年が経ち、その中で定例的な活動ができてきた。 リバーマスターズスクール(以下R Mスクールに略)は川の指導者を養成する目的に96年に始めた。 99年からは実践者となるのが条件の上級スクールが始まり、同年「第2回川に学ぶシンポジウム」の一環として全国に呼びかけた初級スクールを開催。 北上川子ども交流会は、岩手と宮城の子どもたち50人ずつ計100名による川の体験活動であり、97年から実施。 年2回の流域クリーンアップや舟運可能性調査などを実施。 このように事業を流域各地で行うことは、メンバーを知ることができ、各地域相互のつながりができるようになる。また、主催地では人材の養成と発掘につながり、ネットワークが広がっている。</p>	<p>近年、川や自然を対象にした事業が多くなり、スタッフの活動が増え、準備や打ち合わせにかかる時間や集合するためにかかる時間等、仕事との両立も含め、時間的な制約が課題になる。 流域人口140万人を考えると、まだ実践者、関係者はほんのごく一部であり、特に若者や女性層の参加が少ない。 活動をしやすいためのフィールド・拠点づくり、活動に必要な備品の整備、継続的に活動できる体制づくりなどが課題。 川の活動を支援する「北上川センター・盛岡」ができ、よりよい関係づくりを模索していく必要あり。 人が好きで、川への思いを持っている人たちが集まっており、今後、それぞれの思いをどうつなげていくことができるのか、意気に感じる活動をどこまで一緒に広げていけるのか、これが一番大きな課題である。</p>	<p>川を軸とした地域連携、流域を単位としたネットワークづくり、川の人材養成という特色が社会的にタイムリーだったのか、多くの立場の人に受け入れてもらうことができた。また、行政からも支援をいただきながら一緒に活動ができた。 今後も多様で幅広い層での合意形成をめざしながら、より綿密に相互の情報交換を行い、継続的に活動していくことが大切。 さらに各地域での活動が進んでくにつれて、本交流会は、流域全体の調整役として各地域が自立できるような支援、協力という方向に進んでいく必要がある。</p>
<p>イーハトーブ岩手「黄金王国」事業 &lt;黄金王国推進委員会&gt; :0191-23-2350</p>	<p>岩手県では、「新しい旅推進事業」として、広域観光推進組織づくりに取り組んだ。具体的には、いま求められている「新しい旅」のステージとして、県、市町村、民間団体及び業界とが連携し、それぞれの地域の特性を最大限に活かし、さらには新しい観光資源を発掘し、地域提案型の旅行商品の開発を推進する目的で、4つの「王国」を創造した。 県北部の「穀彩(こくさい)王国」 沿岸部の「魚彩(ぎょさい)王国」 県西部の「湯雪(ゆき)王国」 県南部の「黄金(おうごん)王国」</p>	<p>岩手県には59の市町村があり、このうち、県南部に位置する19市町村が「黄金王国」のエリアである。県南部の観光の中心と言える平泉町の中尊寺・金色堂に象徴される黄金文化にちなんで、「黄金王国」の名を戴いている。 「黄金王国」は、地域連携による観光振興推進組織と言え、組織としては、市町村、観光協会、宿泊施設、観光施設の65団体が会員となり、活動を行っている。 具体的には、エージェントとの提携による新しい旅行商品の販売、エリア内48施設によるスタンブラリー、誘客イベントの開催、エージェントプレゼンテーション、誘客キャラバン、地場産品を使用した共通料理の開発など。</p>	<p>従来の広域観光振興の方策としては、市町村会員による協議会運営が例として挙げられるが、この方式では、単にパンフレットやポスターの作製・配布程度に留まることが多かった。 「黄金王国」については、民間団体が会員に加わることで、観光の現場サイドからの意見、提案が得られるという効果が顕著で、エージェントとの提携により、実際に「旅行商品」を売り出していることなどは、広域観光振興の新しい手法と言える。 エージェントプレゼンテーションや誘客キャラバンなどは、民間団体会員が連携して自ら企画・活動するなど、個々の施設への誘客から、エリアへの誘客を促進することによって個々への誘客に繋がっていくという考え方が醸成されてきている。</p>	<p>19市町村のエリアには、観光地や宿泊施設が整備されている所と、十分でない所もあるなど、観光施設や景勝地、宿泊施設が偏在している。したがって、エージェントが商品企画する際には、どうしても知名度の高い地域、施設を核とした商品形態を探らざるを得ない。 偏りを解消するため、エリア内の施設を巡るスタンブラリーの実施により、エリア内を回遊させる工夫を行っている。(根本的な解決策とはなっていない) エリア内を貫く東北新幹線や東北縦貫自動車道などの交通幹線から派生する交通網や、バスなどの交通手段、さらには観光案内板などの公共サインの整備している。</p>	<p>現在の旅行形態は、「安・速・短」と言われ、規模的にも団体旅行から職場、友達、家族という単位に変わってきている。これは、身軽になった分だけ旅行者の行動範囲が広がるとともに、本当に魅力ある観光地を旅行者が容易に選択することができるということである。したがって、旅行者を受け入れる側は、情報提供や観光施設の整備など積極的に行う必要がある。 王国内市町村において、新たな観光資源の発掘や公共サインの整備などを行い、旅行者が訪れやすい環境整備に努める。 常に観客の動向を把握しながら、タイムリーな情報提供や旅行商品の企画を心がけていく。このようにして「黄金王国」を、様々な目的を持った旅行者が、真に自分の旅を演出できるステージとなるよう、交流と連携のことで積極的に取り組んでいく。</p>

交流と連携によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>黒部川流域4町共同プロジェクト                      &lt;黒部川流域4町共同プロジェクト推進連絡協議会&gt;                      :0478-82-1111</p>	<p>千葉県の北東部、肥沃な農村地域である黒部川流域4町(干潟町、山田町、小見川町、東庄町)は、水と緑に恵まれ、地形、産業構造、人々の文化習慣まで類似した地域で、かつては「黒部」と称され、同一文化圏にあった。現在、沈滞ムードの漂う既存産業の再構築が急務であるが、とりわけ地域における主幹産業の農業の衰退は、地域全体の活力低下という大きな問題の主要因となっている。そこで、単独自治体による取り組みだけでなく、同一文化圏にある4町が、地域住民の共通目標を確立し、広域かつ戦略的な共同プロジェクトを打ち出し、公民協働の施策導入により、地域全体のレベルアップを目指すことを目的に平成元年に「黒部川流域4町共同プロジェクト推進連絡協議会」を設立した。</p>	<p>「新しい農村(農業)の確立に視点をあてた地域づくり」を4町共通のテーマとして掲げ、地域の特性や課題を踏まえた広域的な施策を推進することを目的とした『黒部アグリカルチャーランド計画』を策定した。同計画は、「農業、農村地域」を基本的なテーマとし、「コンベンション」「各種情報の受発信」「販売、宿泊、飲食機能」を持つ4町全体の大規模な中核施設と各町ごとに特長を活かしたファームクラブを位置付け、それぞれが役割分担と連携をもって個々の農家の所得アップから地域のイメージアップまで、「人」「もの」「情報」の交流を創出する「農村リゾート」の整備を目標としている。</p> <p>フォーラムの開催                      農村ミュージカルの招聘                      オリエンテーリング大会                      田園コンサート                      などのイベントや各種研修会事業を展開している。</p>	<p>当プロジェクトの段階的な実現に向け、各町ごとに、朝市の開催、観光農園の設置、農村塾の開催、農業公社の設立などの施策を展開中。</p> <p>ハード整備においては、プロジェクト重点整備箇所として、各町ごとに地域資源を活かした史跡公園や親水公園等の整備を行うなど、地域全体の魅力を高める事業を推進している。</p>	<p>『黒部アグリカルチャーランド計画』も、策定後約10年を経過し、社会経済情勢が大きな変革期にある中で、計画の見直しが必要になってきている。</p> <p>特に魅力的な観光資源や集客施設、特産品等がないため、活性化の柱となるものが見いだせない状況にある。</p> <p>計画の中で集客機能を有する中核施設として位置づけられている交流施設(アグリカルチャーセンター)等のハード整備については、財源等の問題で具体的な進捗がない。</p>	<p>平成10年度には、国土庁の地域振興アドバイザー派遣制度を活用して、地域活性化の手法として「グリーンツーリズム」導入の可能性について検討を行った。</p> <p>同事業では、4町から農業従業者や商業者など、広く住民からの参加協力を得て、分科会を設置し「地域資源の整理」や、「農業の多角的な経営」「都市住民との交流」等について検討を行い、平成11年度以降のアクションプログラムを作成した。</p> <p>今後は、(仮称)「グリーンツーリズム研究会」を設立予定</p> <p>地域住民の組織づくりと行政の支援体制づくりを進め、まちづくりの先導的施策として展開し、農業の6次産業化を図る。</p> <p>4町共同の直売所の設置                      体験農園や宿泊機能をもつ交流施設の整備を視野に入れた事業展開を推進していく。</p>

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>新潟県東頸城郡 越後田舎体験 &lt; 越後田舎体験推進協議会 &gt; : TEL.02559-2-3988</p>	<p>美しい風景を舞台装置に、自然とふれあう機会を都市生活者にも提供しようと、郡内の6町村(安塚町、浦川原村、松代町、松之山町、大島村、牧村)が共 hands を携えて、平成10年度から行っている体験事業が「越後田舎体験」である。 複数の町村が連携して体験事業を進めきっかけは、「これからの時代には単独で事業を実施することには限界がある。まとまった方が事業効果も上がるだろう」という共通認識で、各町村長の肝煎りで「ひがしくびき広域まちづくり委員会」が発足。 事業運営については、6町村と事業に賛同する地元の旅館・民宿や体験施設が協力して「越後田舎 体験推進協議会」を組織し、町村負担金と参加施設からの会費で事業費用を賄っている。</p>	<p>同委員会は平成4年の設立以来、湯めぐりチケット(温泉共通入場券)販売 ひがしくびき名産案内パンフレットや定住ガイドブックの作成 共同イベントの開催 雪にまつわる創作童話「雪国のおくりもの」発刊 Uターン者の受け入れ促進事業 「越後田舎体験」では 春山遊歩、紅葉狩りなどの自然体験プログラム ホテル観察や雪おろし作業などの環境学習プログラム 田植え・稲刈りや田舎料理づくりなどの農業・味覚体験プログラム 陶芸やわら細工などの伝統工芸・クラフト体験 スキーやパラグライダーなどのスポーツ体験 全部で70を超えるメニューを揃え、「発見と感動のある本物の自然・田舎体験」をモットーとして事業を展開。</p>	<p>「越後田舎体験」は、今のところ中学生の体験学習旅行を主な対象として受け入れている。「体験する生徒たちには、詰め込みもせず、ゆったりと滞在してもらい、何か一つでも学んで帰ってほしい。こういう土地に来てリラックスできるということ学ぶことも有意義」大人も子どももストレス社会といわれる今日、ストレスを発散する方法を学んでおくことも貴重な体験になるはずである。 学校単位での受け入れが主流であるため、一般の受け入れは今のところ少ないとのことであるが、「春に学校の体験旅行に参加した中学生がこの土地を気に入りに、夏に家族を連れて再度来てくれたこともありました。この土地を気に入ってもらえれば、冬にスキーに来てくれるかもしれない。成人して彼氏・彼女を連れてきてくれてもいいし、子どもができれば家族で来てくれてもいい。人生の長いスパンで関わりが出てくることを期待しています」(小林さん)。</p>	<p>「越後田舎体験」の一番の目的は、地元で経済効果を生むことであるという。したがって、年間売上げの約2,500万円は、すべてインストラクターや協議会に加わっている宿泊施設などに分配される仕組みになっている。 事業をやり、地域を活性化させるには、地域の外から来るお客さんにお金を落としてもらうことが課題。 外から入ってきたお金が地域の中を回ることではじめて経済効果が生まれるため、誘客の努力と同時に、リピータの定着が課題。 そのためにも、参加者と直接に接する各インストラクターの質の向上は避けて通れない問題。 体験の醍醐味を子ども達にきちんと伝える技術については常に練習していく必要がある 定期的にインストラクター対象の講習会を開催してレベルアップを図っている。 ボランティアではなく、報酬を支払ってインストラクターになってもらっているのも、お金をもらうことで張り合いと責任感を持ってもらうため。 今後の事業の進め方も、ハード面は各町村にある既存の施設を有効活用することとし、人づくりなどのソフト面に重点を置く方針である。</p>	<p>小中学校の実生活との関連を図った体験的な学習の重視を謳った「総合的な学習の時間」との連携による体験学習の需要の増加に期待。 早く気づくべきだった。自分たちの住んでいる田んぼやブナ林、そして昔からの知恵や暮らしが訪れる子供たちに新たな感動と発見を与えることに。 新しいものなど創り出さなくても素晴らしい舞台があった。 飾ることはない、生産現場の第一線で頑張る農家の誇りや生き様、誠実な姿が子供たちに普段と違う「空間」と「自分の存在」を発見させる。</p>

# 国内の事例

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>山梨県白州町 白州「田楽塾」 :0551-35-2121</p>	<p>山梨県の北西部、長野県と接し、南アルプスの名峰・甲斐駒ヶ岳の山懐に抱かれた白州町は、古くから栄えた甲州街道・台が原宿の町並みを残し、日本名水百選の尾白川が流れる自然豊かな町である。白州町のよさを明確にアピールするやり方はないのか、という反省を基に発想を逆転させて考え出したのが、この「白州「田楽塾」」であるという。そのため、「白州「田楽塾」」では、参加者各自の現地集合現地解散を基本としている。清冽な名水によって良質の白州米や銘酒が産み出されてきたこの町では、しいたけの原木栽培や黒毛和牛の飼育も盛んで、このような地元の資源や産業を活かして体験事業にまともな上げたものが「白州「田楽塾」」である。</p>	<p>都市と農村との息の長い交流を目標に、地元の農家などから田舎文化を学ぶ農村体験コースを11コース(酒オーナー、しいたけオーナー、山菜狩り体験、味噌づくり体験、野菜づくり、豆腐づくり、蕎麦づくり、きのこ狩り、白州山歩き、燻製づくり、山菜オーナー空区画募集)用意し、都会人に新しいふるさととゆったりとした時間を持つことを提案している。</p>	<p>多彩なコースを用意しているが、その中でも人気の高いコースの一つが、「酒オーナーコース」である。自分だけの酒をつくるために米作りからこだわろうというもので、酒造りの好適米である「美山錦」の田植えから稲刈りまでを塾生自らが体験する。平成12年度については、5月に田植え、9月に稲刈り、12月に酒の仕込み見学会と新酒の利き酒会という日程で体験事業が行われる。</p> <p>「酒オーナーコース」を取り仕切るのは山梨銘醸(株)、地元で操業150年の歴史を有する老舗の造り酒屋である。酒の仕込み見学会と利き酒会はもちろんのこと、春の田植えや秋の稲刈りの体験事業も主催し、コース全体を一貫して社員スタッフで行っている。参加者たちは、瓶にマイラベルを貼って、オリジナルのボトルを手にする。新酒の利き酒会では、地元産の食材を肴に、田植えや稲刈り体験を共にした仲間と語らいの時を過ごす。同席した杜氏さんから酒づくりの苦労や蔵出しの喜びなどの話を聞けば、手作りの酒にも一段と愛着が深まるに違いない。</p> <p>「酒オーナーコース」参加費は一口17,000円で、一口につき5人まで参加できるため、家族やグループでの体験も可能である。この17,000円の中には、酒10本だけでなく、田植え、稲刈りの体験費用と酒仕込み見学会費用が含まれており、かなりお得なコースといえるであろう。</p>	<p>担当者としては、行政の手がかかってしまうというのが一番の悩み</p> <p>「酒オーナーコース」のように、お金のやりくりも含めた準備から実施までを事業主体が主導的にを行い、役場はそのバックアップのみを行う、というかたちで進めるのが理想であるがむずかしい。</p> <p>自らワインパーティーや収穫祭などのオプション企画を持ちかけてくることもあるという、オプション企画で儲けを出そうという考え方も始めている。</p> <p>取りかかりは慎重に、行い、最初から行政が突っ走ると農家はお手伝的存在になり、全部行いがやることになってしまうので注意が必要。</p>	<p>「白州「田楽塾」」に参加してくるのは、もともと「田舎をまじめに遊びたい都会人へ」というコンセプトでやっているの、「まじめに遊ぶ」という観点からも、ある程度上の年齢層をターゲットにしており、40～50代の男性とその家族が多い。</p> <p>「酒オーナーコース」は、そのような年代の男性に「やってみたいな」と思わせるようなコースとして考えられ、事業初年度には委託会社を通じて、京浜地区の30～50代の家族持ちの男性あてにダイレクトメールを送った。当初、役場としては、酒好きのお父さん達の「自分で飲む酒を自分でつくりたい」という趣味へのこだわりをニーズを考えていたが、予想に反して、家族連れの参加者が多かった。趣味の酒づくりだけでなく、子ども達に農作業を体験させられるという一石二鳥のお得さが人気を呼んだ。参加者のリピート率も3～4割くらいで、反応はかなりいいという。体、というように全く別の団体がやっているケースがあり、役場の方でコース全体を統括していくしかなく、負担が重くなる。</p>
<p>岩手県花泉町 田舎まるごと体験交流 (グリーン・ツーリズム△in花泉) :0191-82-2211</p>	<p>平成9年度、意欲的な農業者や農産物加工等に取り組む女性等による「花泉町グリーン・ツーリズム推進協議会」が組織され、本町におけるグリーン・ツーリズム活動が本格化した。</p> <p>ここから生み出された企画、それが「田舎まるごと体験(グリーン・ツーリズム△in花泉)」である。「自らが楽しみながら」をコンセプトに、ありふれたツアー形式のものではなく(同協議会員個々が受け入れ先となり、1年を通りいつでも訪れる方の希望するプランに四季折々の体験メニューで対応している。「お仕着せじゃなく気ままなプランで体験できるのがいい」と来訪者からは好評である。</p>	<p>花泉町では、町名に由来する「花」と「泉」に着目したまちづくりを進める一環として、「フラワーマネジティ花泉」構想を掲げ、都市と農村の交流事業や花いっぱい運動などに代表される緑豊かで美しい農村、交流による活き活きとした農村環境づくりに取り組んでいる。花と泉のまちづくりが果たしてきた役割は、美しい景観づくりと観光面だけに留まらず、平成6年に町内の異業種青年の有志が主体となり、地域おこし事業を仕掛けていこうと「花と泉のまちづくりフォーラム(塾)」を結成、地域資源を活用した種々の交流イベント等を企画運営するとともに、改めて地域の隠れた魅力の発掘に取り組むなど、次第にグリーン・ツーリズムに対する気運が高まっていった。</p> <p>田植えや稲刈り体験 天然山芋掘り ドジョウ取り 沼エビ取り 牛の世話 フラワーアレンジメント 繭細工まで</p>	<p>第二の人生の舞台に花泉町を選び就農した同協議会の副会長が自らの経験を活かし、自宅を開放しての農業体験や都会からの新規就農希望者への相談など、都市生活者の視点に立ったアドバイスを行う「農村体験塾」を主宰しており、これが「田舎暮らし」に憧れる都会人の心を動かし本町への移住希望者が増加している。</p> <p>交流人口が増加する中、町外からの来訪者に地域の食「餅」を味わってほしいと、農家女性等による自宅を改造しての「農家レストラン」もオープン</p> <p>農家起業による新しい経済効果が生まれつつあり、「何の特徴もない田舎」は今や農家起業に取り組みもうとする活力に満ちてきた。</p> <p>アグリビジネスに取り組みもうとする農業者を支援しようと花泉町ではこうした取り組みに対し町独自の事業として「花泉町農家体制整備確立基金助成事業」を創設し、経費の2分の1を助成するなど、普及振興に努めている。</p>	<p>グリーン・ツーリズムへの関心が高まるにつれ、全国各地で続々と拠点施設と称した大型施設整備が進められ、行政はこれを拠点としたグリーン・ツーリズムツアーを数多く企画し、地域の活性化の機会を見出そうとしている。</p> <p>受け入れる農家の心は重く、都市からの客に気遣い、確かに客は田舎体験を満喫したかもしれないが、迎える農家はその準備と対応でどっと疲れる。</p> <p>事業を進める上で、主体と客体のギャップをどう埋めるかが課題</p> <p>画一的で行政的な事業の段階を越えてその本来の姿に近づけるにはどうしたらよいか課題。</p>	<p>花泉町が進めるグリーン・ツーリズム活動の基本は、都市生活者との交流の中から、地域の農業者が、稲作や畜産等の傍ら、農家民泊や農家レストラン、農産物の加工、直売など、地域特性や自家生産物を活かしたアグリビジネス化による「第二の経営基盤づくり」をすることにあると考える。その実践プロセスは、あくまで行政が主体ではなくハード先行にならず住民が自らのものとして主体的に取り組み、単なる交流や観光に留まらない「自らの業」として自立させ、それを豊かで活力ある農村を維持・再生するための手段としてサポートする活動を展開する。</p>

# 国内の事例

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>宮城県若柳町 都市・農村体験交流事業 :0228-32-2124</p>	<p>若柳町では、これまで、注連縄づくりやレンコン掘り、さらには「アグリトライ事業」と称した小学生対象の自然学習、また、仙台都市圏の消費者対象の「農業体験ツアー」や、「わかやなぎ秋まつり」等の交流を行ってきたところである。しかし、これらの交流は、とすれば、1回限りの交流に終わる傾向があり、地場産品の消費拡大や、地域経済の活性化に直接結びつく成果があったとは必ずしもいえない状態であった。</p> <p>今後の農業あるいは農村の振興にとっても、従来とは違った形で都市住民と交流を深める必要があると考え、平成8年度に、若柳町におけるグリーン・ツーリズムモデル構想を策定し、若柳町グリーン・ツーリズム研究会という組織を設立し、農村の多面的な価値や機能を都市住民に正確に理解してもらうため、農村・都市交流事業に取り組んでいる次第である。</p>	<p>「自然が取り持つ 人と人との交流で 活力ある町づくり」をキャッチフレーズに、若柳町グリーン・ツーリズム研究会が中心となり、様々な体験交流を展開している。体験には、自然観察体験及び農業（加工）体験などがあり、農村の恵まれた自然ゆとりある生活といった都会にはないすばらしさを都市住民にアピールしながら、交流を通じて豊かな農村づくりをめざしている。</p> <p>この体験交流事業は、一般的な旅行ではなく「滞在型の余暇活動」であり、実際に農村に滞在し、自然や農村での生活を体験することによって「ゆとり」を楽しみ、農業・農村の現状を理解する機会となる。また、体験や宿泊することによって農家と都市住民との交流による心のふれあいが生じ、地域の活性化へとつながっていく。</p>	<p>これまで、地域資源としての伊豆沼を活用した自然観察や、町内農家が生産した農畜産物を使用しての農業（加工）体験交流事業に参加した来訪者には、田舎の自然を満喫し、ゆったり、のんびり気分（癒し）を味わいながら体験してもらうことにより、大変喜ばれている。</p> <p>体験交流を通じ、参加者と直接農産物の取引を行う農家が出てきており、町内農家の女性のいきいきとした活躍が生じ、「女の立場」が向上している。</p> <p>事業の目的である都市住民の農村への理解及び農家所得の向上に結びついている。</p>	<p>通過型の余暇活動から滞在型の余暇活動を目指して事業を展開している現状であるが、グリーン・ツーリズムの理念からは、十分な発展段階になっているとはいえない。</p> <p>現在行っている体験交流事業は、農家民宿等の滞在施設が十分に整備されていないことと滞在型体験交流メニューの不足により、一部に宿泊しての交流があるものの、全体として未だ通過型・日帰り型交流に留まっている。</p> <p>通過型から滞在型へ移行するためには、農家民宿等の滞在施設の整備と共に、本町にある地域資源と連携をとりながら、滞在型体験交流メニューを増やしていくこと。</p> <p>情報発信センター等を整備し、それを訪問者に正確に伝えること。</p> <p>どのようにリピーターを増やすかが、大きな課題となっている。</p>	<p>体験交流事業を実施している者のみだけでなく、住民の理解を深めるために、普及啓発活動や情報ネットワークの形成、さらには農家民宿のネットワーク化、実践者・関係者のネットワーク化を広く図る必要がある。</p> <p>農家や住民の主体的な意志を最大限に活かすような、柔軟な発想による各種事業の活用や指導が重要。</p> <p>体験交流事業の推進主体は、あくまでも農家をはじめとする町民であり、各種ボランティア団体や各種業界、関連団体、そして児童から高齢者まで、多様な人々の主体的・積極的な参加を促すことが必要。</p> <p>町民の主体的な参加をより持続的で質の高いものに組み立てるために、コーディネート機能を担う専門家集団の活用が不可欠である。</p> <p>各種体験交流事業を持続的かつ発展的なものにするためには、継続的に交流できる都市地域の確保が必要になってくる。</p>
<p>茨城県北茨城市 マウントあかね :0293-30-0606</p>	<p>豊かな自然資源と観光資源を活かし、「観光」と「第一次産業の振興」を有機的に連動させていく中で、農林業体験や食材の提供を通して都市と農村との交流の場を確保し、交流人口の増大と中山間地域の活性化を図っていくことを目的にグリーンツーリズム事業を立ち上げた。</p>	<p>グリーンツーリズム事業の中で、ハード面として、「マウントあかね」を整備した。</p> <p>本市におけるグリーンツーリズムの目的は、首都圏などの都市住民に農村で暮らす住民の日常生活に触れてもらい、また、農村の安全性・快適性を実感してもらうことにより、自己発見や自然の恵みを再認識する契機としてもらうことにある。したがって、ハードの整備ばかりでなく、ソフト面の事業の展開が重要になっている。</p> <p>拠点施設である「マウントあかね」の市内外に向け情報を発信</p> <p>市ホームページ、新聞、旅行雑誌等により本施設並びに本市のグリーンツーリズム事業を広くPRしている最中。</p>	<p>夏休みには、地元住民で組織される「花園街道活性化協議会」を中心に、キャベツやナス、キュウリ、サヤエンドウといった地元農産物の直売や隣接するガラス工房でのガラス体験、本市に生まれた石井竜也さんが描いた絵画・イラスト展など、本市の特色を活かしたイベントを開催し、多くの人が本市を訪れた。</p> <p>農業体験においては、「こんにゃくづくり」や「そば打ち」、「ジャガイモ掘り」など、地元の食材を活かした体験メニューへの参加も多かった。このように、イベントを通して、住民のグリーンツーリズムに対する関心と地域の活性化に対する意識の高揚を図ることができた。</p>	<p>グリーンツーリズム事業においては、ソフト事業の充実が不可欠である。</p> <p>都市と農村との交流事業をどう展開していくか、提供するサービスや受け入れ体制などをいかに充実したものにしていくかが今後の課題である。</p> <p>季節や人数、年齢構成にあわせた多種多様な体験メニューを用意し、都市住民のニーズに添っていくことが本市のグリーンツーリズムの発展の鍵となる。</p> <p>農林業者や関係支援機関で構成する「市農林業体験連絡協議会」を設立し、具体的に農林業体験等を受け入れる体制づくりを確立した。</p> <p>当協議会の円滑な運営とグリーンインストラクターの養成が必要である。</p> <p>既存の観光施設等との有機的な結合による海岸部と山間部の観光ネットワークを構築していくことも併せて推進していく必要がある。</p>	<p>グリーンツーリズムは楽しさを発見してもらうことが大前提である。</p> <p>北茨城の自然を最大限に活用して「食う、ねる、あそぶ、学ぶ、発見する」の時間を過ごしてもらえように、市民の多くの方々に参加してもらい、多様な体験メニューを提供できるように研究していかなければならない。</p> <p>多くの人々に訪れてもらえるように、北茨城の環境や雰囲気、清潔で恥ずかしくないものにしていかなければならない。</p> <p>グリーンツーリズムに参加することがまちづくりへと結びつき、ひいては地域のイメージアップが図られるよう取り組んでいくことが必要である。</p> <p>自然豊かな「北茨城」の良さを訪れた人すべてが感じられるよう事業展開をしていかなければならないと考えている。</p>

# 国内の事例

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>埼玉県彩の国グリーンツーリズム育成事業 : 048-830-4095</p>	<p>余暇時間の増大や、もの豊かさから心の豊かさへの価値観の多様化に伴い、農村に滞在して「農林業や伝統芸能の体験」、「自然景観や歴史的な遺物とのふれあい」、「地域の人々との交流、を楽しむ滞在型の余暇活動に対する都市住民のニーズの高まりを受け、埼玉県では平成9年度から「彩の国グリーンツーリズム活動促進事業」を実施し、必要な施設整備や受入れ体制づくりを進めてきた。 さらに平成11年度からは、地域で行われる体験交流活動自体も事業対象とした「彩の国グリーンツーリズム育成事業」に発展させた。</p>	<p>彩の国グリーンツーリズム育成事業は、グリーンツーリズムに係る立案や指導調整から始まり、体験交流活動に必要な条件の整備、実際の交流活動に至るまでの一連の流れをカバーすることを目的として、以下の内容で構成している。 1 県協議会を設置し、立案や協議調整などの活動を行う「県推進事業」 2 グリーンツーリズムに必要な施設や受入れ体制の整備に対し助成する「施設整備事業」 3 県内各地で実施される体験交流活動に対し助成する「ふれあい体験ウォーキング開催事業」 4 文部省の「子ども地域活動促進事業」と連携し、小・中学生を対象とした体験交流活動に対し助成する「ふれあい学校開設事業」</p> <p>以上の内から、必要であれば施設整備から取り組むことができ、また、直ちに交流体験活動を開始することも可能としており、グリーンツーリズムを実施する地域の実情に応じた柔軟な対応を可能としている。</p>	<p>施設整備関連では、前身の「彩の国グリーンツーリズム活動促進事業」において秩父郡横瀬町でハイキングコースや農村公園施設等の整備を行ったほか、現在は、秩父郡荒川村において散策道等の整備、入間郡越生町では観光農園やハイキングルートの整備が進行中であり、完成の暁には、周辺の観光資源と併せて地域のグリーンツーリズムの発展に大きく寄与することが期待できる。</p> <p>また、体験交流活動である「ふれあい体験ウォーキング開催事業」については、11年度に比企郡小川町、秩父郡東秩父村、北埼玉郡大利根町において実施され、延べ約400人の参加者が、史跡めぐり、いちご狩り、そば打ちやまんじゅうづくりなどの体験活動を通じて受入れ側の農家等との交流を楽しんだ。</p>	<p>交流体験活動を開催するに当たり、その実施をいかに都市住民に周知させるかについての課題がある。</p> <p>地域により応募者数にばらつきがある。 グリーンツーリズムの趣旨である体験活動をいかに多く、多彩に計画できるかが重要。 これに必要な受け入れ側の体制をさらに充実させていく必要があると考えられる。</p>	<p>本県は県民総数690万人余を数え、その大部分がいわゆる都市地域の住民であることから、今後ともグリーンツーリズムが発展する余地は極めて大きい。</p> <p>都市住民には、農山村の豊富な資源を活用したゆとりある休暇を満喫してもらおう。 受け入れ側にとっては、入込み客の増加による地域社会全体の活性化が図られる。 体験活動を通じて交流を深めることができ、双方ともに得られるものが大きい。 グリーンツーリズムの実施を契機として、入込み側と受け入れ側の相互的かつ持続的な交流活動に発展することを期待しつつ、事業を進めていきたい。</p>
<p>東京都新宿区 親子体験田植え・稲刈りツアー :03-3365-6100</p>	<p>新宿区では以前から、米消費拡大事業の一環として東京都より補助金を受け、「米の産地見学会」を実施してきた。区民の参加者を募集し、借り上げバスにて日帰り関東近辺の産地を見学し、米への理解を深めてもらう事業であった。農協や精米所、稲刈りの現場を見学するなど事業目的の達成に相当の効果があったことは確かである。しかし、実体験を伴わない見学ゆえ、遺憾ながら一部の参加者に物見遊山気分が感じられるという懸念も生じていた。</p> <p>そんな折、当区の友好提携先である長野県高遠町との交流が5周年を迎えたこと、また、同町に宿泊先として最適な「国立信州高遠少年自然の家」が新設されたことなどタイムリーな背景の後押しもあり、積極的に既存事業の見直しを行い、平成3年度から現行の「親子体験田植え・稲刈りツアー」事業が始まったものである。</p>	<p>年度当初に区報により参加者(小学3～6年生親子約40名)を募り、説明会を経て、5月の田植えツアーを迎える。水田は現地の農家から無償で借り受けたものであるが、田植え後の管理については、少額の委託料を支払っている。10月の稲刈りツアーは、田植え時と同メンバーで向かい、収穫を楽しむ。ちなみに田植えも稲刈りも機械を使わず、手作業で行う。刈られた稲は精米後に参加者に送られ、自分達が植え、刈った喜びを味わってもらう。以上が概ね一連の流れである。</p> <p>ツアー当日の流れとしては、初日土曜日の昼過ぎに借り上げバスで新宿を発ち、夕刻に宿舎の国立信州高遠少年自然の家に着着する。夕食後、工作(こけしの絵付けや竹とんぼ作り)などをして参加者間の交流を深める。入浴後、就寝まで懇談によりさらに親交を暖める。翌日は、朝食後に宿を発ち、現地で高遠町の参加者と合流する。田植え(稲刈り)を体験後、かかし作りやそば打ちなどを合同で行い「ふるさと体験」に彩りが加えられる。昼食、入浴(現地ホテルの温泉を拝借)、施設見学会、名残惜しくも現地を発ち、夕刻に新宿に帰着する。</p>	<p>都会に住む者、特に自然に触れ合える機会が少ない子供たちにとっては貴重な体験となることであろう。カエルやバッタを捕まえ喜々としている子供たち。その傍ら、「子供の頃はこうして手伝ったものです」と懐かしそうに作業している親たちの光景はほほえましい限りである。</p> <p>持ち帰った稲の苗を学級ぐるみで育てたエビソードや、夏休みに植えた稲を見てきたこと、高遠の子と文通していることなど、うれしい報告もたびたび聞かされる。</p> <p>本事業はリピーターも多く、下の子が対象学年になり、「この子にも体験させたくて…」と応募してくる親も多い</p>	<p>現状では、問題点は少ないが、多数の行事を体験してもらいたいのがゆえの過密スケジュールは否めない。根本的原因是に現地が遠いことであるが、当区としては友好提携先の高遠町で行うことに意義があるので、今のところ場所の変更は考えていない。</p>	<p>平成14年度から学校週休2日制により土曜日が休みとなる。その際は、上記問題点の解決と、ますますの内容の充実を図りたいところである。例えば、出発時刻繰り上げによりスケジュールに余裕を持たせ、農家や農協を訪問したり、機械による田植え・稲刈りなども見学するなど、体験学習のバリエーションは多々考えられる。</p> <p>前述宿泊施設には、多数の青少年活動プログラムが用意されているので、それらを併用することも有意義であろう。</p>

# 国内の事例

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>神奈川県藤野町 やまなみ五感体験ツアー開催事業 :0426-87-2111</p>	<p>水源地域に住む人々の暮らしを都市住民に知ってもらうこと、水源地域の重要性を理解してもらうことを目的とし、神奈川県内のダム湖を有する6町1村で9地区の交流の里をつくり、自然体験教室や里文化祭などのイベントを平成6年度から実施しているものである。</p>	<p>「陣馬の里 佐野川」と「エコ・アートヴィレッジ 牧野」の2か所が設定されており、毎年、自然体験教室「やまなみ五感体験ツアー」を開催している。 当町の特色は、事業開始以来、毎年違った内容の体験ツアーを実施していることである。 恵まれた自然を活かした「バードウォッチング」「星を見る会」「農業のある暮らし楽しい体験」 伝統技術の保全を目的とした「炭焼き体験」「手作りコンニャク体験」「手作り茶体験」 ふるさと芸術村メッセ - ジ事業のPRを兼ねた「陶芸体験」「ハーブ料理教室」など</p>	<p>この体験ツアーは、主に横浜市・川崎市・相模原市などの都市部地域住民を対象としているが、毎年、定員を大きく上回る応募者の中から抽選で参加者を決定しているのか、時には「なぜ抽選漏れをしたのか」「本当に厳正な抽選をしているのか」などの苦情を受ける場合もある。「陶芸体験教室」では、雪という悪天候にもかかわらず、抽選で選ばれた参加者20名のうち欠席者は僅か1名という出席率に主催者側も驚かされた。</p>	<p>体験ツアーを契機に地元住民が自発的に活動し、地域を活性化させようとする意識をもってもらうにはどうすればよいのか。体験ツアーの開催で新たな地域資源を発掘できるというメリットはあるが、毎年度違った事業内容のために継続性がないというデメリットもある。継続するには、地域にまとまりがあること、ある程度の財政的援助があること、技術の保全をするための後継者を育成することの3点が必要不可欠であると考えが、高齢化が進み、3点の中で最も重要な後継者の不足に悩まされている。 体験ツアーがきっかけとなった定住者がいない。利便性のよい都市的生活をしてみたいと思うのは当然であるが、自然に触れたときは、「こんなところに住んでみたいなあ」と思うが、実際には今の便利な生活を捨ててまで移住しようとする人は少ないのが現実である。都心から約1時間の通勤圏内にある当町の地勢を考えると、ある程度の基盤整備さえすれば、ある程度の都市的生活をしながら自然に触れられる環境をつくることができ、移住を真剣に考える人も増えるのではないかと期待している。</p>	<p>毎年開催を待っていてくれる人がいるほど人気盛況であるが、ほとんどの参加者が観光気分に参加しているのが残念でならない。体験ツアー終了後に参加者アンケートを実施しているが、感想・意見を尋ねた質問では、「楽しかった」「貴重な体験ができた」との感想が圧倒的に多い。「水源地域の暮らしを知り、その重要性を認識してもらおう」という趣旨を理解されているような、今後につながる感想・意見を待ち望んでいるのであるが、主催者側の努力が今一步足りないということであるうか。 これまでのようなハード先行型都市計画によるまちづくりではなく、住民の意向を踏まえ、地域に人が増えるようなソフト重視の都市計画を行うことが真の活性化につながるのではないかと考えている。</p>
<p>新潟県山北町 ふるさとの焼畑がかぶつみに挑戦 :0254-77-3111</p>	<p>新潟県112市町村のうち10番目に面積が広い町であるが、93%が山林であり、宅地と農地はわずか3%と平地が極端に少ない地域である。昔から林業を主とした第一次産業が栄えてきたところであるが、近年の社会経済の影響を受け、木材価格の低迷が続いて林業の不振が目立っており、第二次産業の建設業関係が主要産業に変わってきている。また、観光においては「笹川流れ」「菅笠八幡宮社叢」「日本国」等があり、四季折々の自然、景観に親しむことができる。 このような背景のもと、昔から受け継がれてきた山村の焼畑文化に着目し、昭和60年度から地元かぶ栽培の主婦グループが受け皿となり、町観光協会が本事業を実施してきたものである。また、昭和63年度に、豊かな資源を活かした観光地づくりの指針「山北町観光開発基本計画」を策定し、特に生活文化資源を活かした体験交流を推進してきた。</p>	<p>木を伐採した跡地で雑草などを焼き払い、大根やかぶ等を植え、収穫が終わった翌年に植する慣習があった。この慣習(生業)が今も受け継がれており、この焼畑農法により栽培されたかぶは、酢で漬けることにより白色から鮮やかなピンク色に変身し、また、食味も辛さを伴う甘酸っぱい独特な味であり、更に血液を浄化する作用もあることから健康にも良いということで、何とか町の特産品にできないものかと検討を始めた。町としても平成元年度から特産品の開発・奨励に取り組みでいたところであり、かぶ種の購入に対しても半額補助することとしてきた。この焼畑農法は、全国的にも大変珍しい生活文化に継承であり、来訪者に野良着に着替えての体験と地域の人々の温かな心に触れてもらうことにより、山北町とその生業を少しでも理解してもらい、地元の人々とともにお互いに喜び合える関係づくりをし、山北に何回も来てもらえるような山北ファンづくりを進めることが肝要である。</p>	<p>この事業を実施するためには、かぶを毎年栽培する人達(受入者)が不可欠であることから、山熊田集落の主婦達に継続して依頼してきた。このため、主婦達のグループとしての組織化がなされ、毎年意欲的にこの事業に取り組んでもらっている。今までは自家消費だけであったかぶも、このイベントにより、商品になるものと理解され、その他の山菜等も販売されるようになり、山里にとっては希望が生まれた。そして、イベントを通じてお互いに話をすることにより、地元の素朴な人情が魅力となり、参加者による口コミもあり、毎年このイベントは募集定員オーバーの盛況ぶりである。</p>	<p>受け入れ体制が完全でないこと、イベントのPRを新潟県内に限定しているために参加者に毎年同じ人が多いことが問題であり、将来的には、受け入れ体制を確立したうえで、首都圏にPRして誘客し、交流拡大を図る必要がある。 今までは地元の主婦達が味噌汁づくりやかぶの準備などをしていたが、参加者とのふれあいが少なく、町観光協会が主体となりイベントを実施していたため、本来の目的である地域の活性化と山北ファンの育成に結びついていないことから、今後は、地元の案内人や体験指導者の養成が必要である。</p>	<p>イベントにおいては、なるべく地域の人たちに前面に出てもらい、参加者とのふれあいを深め、この地域の素晴らしさとこの地域の人々の素朴な人情味ある人柄を理解してもらい、山北ファンになってもらうことで、年間を通じて四季折々の山北町を訪れてもらえるようにしていきたいものである。 かぶだけでなく他の地域資源も含め、それらを活かした起業の醸成を見据え、他の生業体験、特産品販売や宿泊体験などを通じた体験交流型の里づくりを進める。そのためには、地域の人々が案内役や体験指導役に積極的に実施できるような受け入れ体制を確立する必要がある。インターネットなどの普及に伴い、物質的には大変便利な時代であるが、人と人が心を通い合わせることができると地域づくりを目指したいものである。</p>

# 国内の事例

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>島根県石見町 石見町研修事業 :0855-95-1116</p>	<p>高齢者比率は33%にのぼる典型的な過疎地域であり、定住対策には、若者のU・ターンが重要な課題である。そのためにも農村の暗いイメージを一掃することが必要である。香りをテーマにした拠点施設として「香木の森公園」が1991年に整備され、続いて1993年に「ゆとり体感・イン・アロマテック石見事業」がスタートした。この事業は、若い独身女性を1年間石見町に招致し、豊かな自然の中で、都会では味わえない田舎暮らしでのゆとり・ものをつくる喜び・温かい人とのふれあいなどを体感してもらい、石見町を心のふるさととして提供することによって、若者定住への起爆剤とすることを目的に企画したものである。</p>	<p>1993年から4年間継続した「ゆとり体感・イン・アロマテック石見事業」を一部見直し、1997年から新たにハーブ栽培とクラフト加工の2コースからなる「香木の森研修事業」として展開させている。事業は、農村体験型から就業研修型に変化し、賃金も月額7万円から13万円に増額した。しかし、ハーブという特殊性から就労場所がなく、ほとんどの研修生が定住を希望しながらも帰省を余儀なくされることから、2000年から就農や定住につなげるため、受け入れ農家との連携による施設園芸を新たに体験メニューとして加え、「石見町研修事業」の取組みを行っている。</p>	<p>若い独身女性を対象にした農村体験事業ということでマスコミの取材が続く。花嫁対策とか嫁取り秘策と報道されたこともあったが、打ち出した事業は決して花嫁対策ではない。残ることを強制したり、お見合いの斡旋などは一切しない。研修生は、結婚相手を見つけるために田舎へ来たのではなく農村と農業を体験したい、ハーブの勉強がしたいというきっかけとした気持ちを持っている。しかし、いつの間にかカップルが誕生し、町内で結婚した人もあり、これはとても嬉しい誤算であった。</p> <p>10日間の短期研修では、これまで47名を受け入れて好評を得ており、香木の森や石見町ファンとして来訪者の拡大にも貢献している。</p> <p>過去7年間で42名の研修生を送り出してあり、県内に13名が定住し、うち7名が結婚している(2000年10月現在)。</p>	<p>この事業は、島根県知事が定住元年を打ち出した1991年に計画したもので、従来の過疎対策事業や定住対策事業に加えて、これまでにない独自性のある新たな対応策が求められていたときであり、ユニークな農村体験事業として全国から注目を浴びた。しかし、住民の反発もあり、「うちの息子がUターンしても何の助成もないのに、なぜ町外の人に税金から月7万円も出し、宿舍もタダで提供するのかわ」など、厳しい声が返ってきたが、8年間継続した今ではそのような声は聞かれなくなった。住民は、地域行事や集会などに積極的に参加する彼女たちの活動を見て次第に理解を深め、地域の結びつきや伝統行事を伝えていく大切さなど、自分の町に対する価値観や誇りを再認識した。</p>	<p>この事業により、「香りの町石見町」「香木の森公園」のイメージが広く定着し、年間20万人の観光客が訪れる場所になった。早急な過疎対策が問われている今日、確実な人口増加策といえないまでも、この事業を通して都会にはない石見町の価値や町民としての誇りが再認識され、町をPRすることによってUJターンを促進していることが実証されている。今後も交流人口の増大を図り、交流から定住へ、そして、永住化につながる就労対策や住宅対策に力を注ぎたい。</p>
<p>山口県むつみ村 農林業体験学習 :08388-6-0311</p>	<p>県内有数の米どころで、大根やトマトでも県内一の産地であり、和牛生産も盛んで、堆肥を活用した土づくりを基本とした耕畜連携の農業が盛んな村である。</p> <p>その一方で、減反による減収や高齢化など農林業を取り巻く課題も多く抱えている。村では、この課題の解決策のひとつとしてこの修学旅行の受け入れが役に立たないかと考えた。消費地の人たちにむつみ村の農林業を知ってもらうことができ、この貴重な体験は、大人になっても話し継がれるわけで、むつみ村のファンが全国にいることになる。また、これからの農林業はこうした教育の役割も担うべきで、それができる農業者を育成できることにもなる。地元の中学生にとっても、都会の中学生と一緒に農林業体験を通して交流することにより、都会を知ると同時に、外の世界に向けて情報発信ができるようになってほしい。関係機関や団体の積極的な協力のもと、受け入れ体制は年々充実してきた。</p>	<p>農林業体験修学旅行く大阪市立桜宮中学校より、「体験時間をできる限り長くとってほしい、体験を通して農林業や農村生活を理解したい。楽しいだけでなく、農林業の厳しさにも触れさせたい」という要望があった。受け入れ農家のほうも、作業に十分な時間をとり、村の特産を使った手作り弁当と一緒に食べて苦労話を聞かせたり、近くで川遊びや野イチゴ摘みに連れて行ったりと、自然に親しみ、生徒同士や農家が交流できる工夫を凝らしている。こうして、田植え、トマトの植付け、大根の収穫や間引き、メロンの芽かき、そば、豆腐作り、人工林の除伐作業など、むつみ中学生との混合編成の班に分かれ体験が行われる。</p> <p>土と親しむことのない大阪の子供たちは、素足で土を踏み、地元の子供たちと過ごし、素朴な農家と接することで徐々に目の輝きが変わってくる。カエルやアメンボを見て、地元の子供たちは自分たちの世界を再発見する。全てが異次元での新鮮体験なのである。</p>	<p>近年、都市部の学校において、教育の一環として農林業体験や自然体験などを取り入れた学習活動が重要視されてきた。これは、自然とふれあうことが少なくなった子供たちに自然や生産活動の豊かさを再認識させ、個々の感性を育むという大きな教育的効果が指摘されている。大阪市の中学生がむつみ村にやってくるきっかけは、いままでも歴史や観光を中心に組まれていた修学旅行の日程に物足りなさを感じ、子供たちの心に感動が残る体験型の旅行にしたいと考えていたとき、歴史の町萩市を拠点に一日を農林業体験ができる村として本村があることを知ったことに始まる。平成5年、村では実行委員会を組織し、体験メニューの設定、受け入れ農家の選定、むつみ中学校との交流内容など、受け入れ体制を整備していった。一方、地元むつみ中学校でも、地域の「産業」「文化」「歴史」を生徒自らが体験し、理解を深めようと年間を通じて「ふるさと学習」が展開されており、都市部中学生との交流農林業体験学習もその活動の一部とされてきた。この交流は、村を挙げての大イベントのひとつである。</p>		<p>農林業体験の後は、生徒たちの交流会となり、中学校の体育館に集まり名刺交換やゲームを通して、生徒たちは完全に打ち解ける。伝統文化の子供神楽舞に圧倒されながら、別れを惜しみ、再会を誓い合う。この体験により、農村体験ホームステイへの招待や文化祭での収穫祭の実施、Eメール交換など、両校、両地域を相互理解する活動へと発展してきている。今後は、学習活動を中心に広がった輪を地域活動の輪に広げていくよう展開中である。</p>

# 国内の事例

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>愛媛県久万町 田舎いっぱい体験inくま :0892-21-0139</p>	<p>恵まれた立地条件を活かして、昭和50年頃からグリーンツーリズムに取り組み始め、中核的施設である「久万高原ふるさと旅行村」が昭和52年にオープンしたのを皮切りに、地元農家によるリンゴ、ナシ、ブドウなどの各種観光果樹園の開園、農林漁業体験民宿の開業、そして平成11年には「久万農業公園アグリピア」がオープンするなど、ハード面での整備が着実に進められた。また、ソフト面でも山林の分収林契約「久万高原ふるさとの森」、女性生活改善グループによる野菜収穫体験イベント「久万高原秋の収穫祭」、都会の修学旅行生の農家民泊受け入れなどが行われ、大きな成果を上げてきたところである。一方で、近年、子供達の生きる力や命を大切にすることを育む場として農業・農村に大きな期待が寄せられていることから、グリーンツーリズムの一層の推進を通じ、農山村地域の活性化を図りたいと考えていた。</p>	<p>農林水産省の「グリーンツーリズムと心の教育連携モデル事業」と文部省の「子ども長期自然体験村」との連携事業により、主に都会の小中学生を対象に長期滞在型の農林業作業の体験活動をモデル的に実践するものである町内の農林業体験施設で2週間の共同生活をし、自然体験、環境学習、農林作業等の勤労体験、また、スポーツレクリエーションの場を提供した。</p> <p>ダイコンの早期収穫と出荷作業 山林での植樹や木材伐採作業 郷土料理の調理実習 自然環境学習(天文台での星空観察、昆虫・植物採集、川遊び) 地域行事への参加(久万山御用木まつり、久万おどりへの参加) など</p>	<p>この体験活動に参加したのは、普段は農業や林業、豊かな自然環境に触れることが少ない子供達ばかりである。そのため、子供達にとって土や木、そして生の自然に触れることは大変新鮮に映たように、体験後の感想文には「取れたての野菜がすごく美味しかった」、「川遊びが面白かった」、また「カブトムシを初めて捕まえることができて嬉しかった」といった意見が出されている。2週間という長期に渡って親元を離れ、子供達だけで共同生活をする中で、思いやりや自主性、忍耐力、協調性などが次第に養われていく様子が見受けられ、運営するスタッフとしても、子供達の素直さや優しさ、それぞれが持つ豊かな個性に感動や刺激を受けた。</p>	<p>子供達への効果が大い反面、運営する側の苦勞も大きかった。教師経験のない町職員が子供達の指導をすることが精神的、肉体的に非常に厳しいこと、また、屋外の活動が中心となるため雨天の場合に体験活動が大幅に制限されてしまうことなどが挙げられる。</p>	<p>子供達の健全な成長に寄与するために農業・農村に寄せられている期待に応えていくこと。農業・農村の果たす多面的機能への幅広い理解の向上、また、都市農村交流を通じての地元住民の生き甲斐、所得機会創出といった効果を考えれば、この事業を実施する意義は大きく、可能な限り、今後も継続的に実施すべき活動であると考えている。</p>
<p>愛媛県野村町 風の子農業小学校体験教室 :0894-75-0111</p>	<p>「自分でつくる」という機会がめっきり少なくなった現代っ子のため、また、そのような子供達を対象にしながら都市と農村の交流の推進を図るため、平成9年度から「浜筋農業小学校体験教室」を開校。地域の農業を何とか活性化させたい、何かきっかけになるものと考えていた地域農業者の思いと、当時の浜筋地区の土居公民館長との思いが一致し、滋賀県安曇町にある「農業小学校をつくる会」で学び、実施へと踏み切ることとなった。</p>	<p>スタッフは、地域農業者、JA職員、役場職員、主婦などから構成され、代表である校長先生役を野菜農家の一人が務めている。</p> <p>実施するにあたり、これらのスタッフを交えた入念な打合せを開き、どう進めていくのが有効かを話し合った結果、地域内にある、休耕している田畑を借り、年間を通して、参加者に稲作、野菜づくりを体験させることとなった。</p>	<p>参加者の中には、平成9年度からずっと参加している家族もある。「農業を知らなかった私たちが、人のあたたかさや自然の豊かさに触れることができ、有機農法による野菜をつくり、食べられることに幸せを感じる。」この言葉こそが、リピーターを生んでいる理由に他ならない。時には、校長の家に参加者が泊まり、交流をすることもあった。こういった密な関係づくりが、現在、都市への農産物産直販活動へとつながりつつある。特に、米については、過去の参加者からの注文があり、農業小学校の枠を超えた「輪」が少しずつ広がりをみせるようになってきている。</p>	<p>最初は子供中心の作業を重要視していたが、どうしても、知らず知らずのうちに親任せになってしまっている。</p> <p>月1回の開校のため、スタッフにかかる負担が大きく、本当の意味での農業の理解が不足している。本当に農業をやりたい人が自分で管理するのが基本であるため、今後、どういう方法で取り組むのが課題となっている。</p>	<p>平成11年度から、ある高校の先生に「風の子」というテーマソングを作曲してもらい、「風の子農業小学校体験教室」として、新たなスタートを切っている。今後、空き家を利用した宿泊施設の整備を視野に入れ、より地域に密着した教室にしていきたいと考えている。そうすることにより、参加者の拡大が図られ、地域の教育力を引き出し、活性化にもつながっていく。また、現在は、町からの補助金に頼らざるを得ない状況にあるが、継続していくにつれ、この体験教室独自で運営できる「自立」への道を迎えていく必要がある。そうすることで、地域農業者の意欲を増大させ、農業振興に大きく寄与することができると思う。</p>

# 国内の事例

ふるさと体験によるまちづくり事例	交流・連携のきっかけ・背景	事業概要、特徴	特徴効果	問題点、課題	今後のあり方
<p>福岡県赤村 DO YOU 農? :0947-62-3000</p>	<p>赤村は福岡県東北部に位置し、山林が70%の中山間地農村である。明治初期から石炭産業により発展したが、昭和30年代のエネルギー政策転換により、働き場所を求めて人口流出が起こり、過疎化が進んできた。また、昭和44年からの減反政策が基幹農業に大きな打撃を与え、活性化を阻む要因となった。このような村に村外から関心を寄せる人もほとんどいなかった。</p> <p>昭和58年度の商工会主催の盆踊り大会をきっかけにして、昭和61年度から「ふるさと産業まつり」「ふれあい朝市」「農業活性化シンポジウム」などが始まり、少しずつむらづくりの機運が高まってきた。昭和62年度策定のビジョン計画で、農業体験を通じた都市との交流により活性化を図るという村の方向付けがなされ、同年度にDO YOU 農?「どろんこフェスティバル ザ・田植え」「おらが村のイナカーニバル ザ・みのり」が開催された。</p>	<p>この農業体験1泊2日は、都市住民を対象として米消費拡大を目的に「お米の誕生からごはんまで」を実際に体験するものがある。6月の田植え期には「DO YOU 農? ザ・田植え」を行い、田植え体験や芋づる植えなどの農作業のほか、神楽やホテルの観賞などが行われる。また、10月の収穫期には「DO YOU 農? ザ・みのり」が行われ、「ザ・田植え」で自分たちが植えた稲を鎌で刈り取り、昔ながらの千歯(せんば)や脱穀機などを使って脱穀、サツマイモ掘りを行う。田植えと稲刈り以外に田舎体験ができるようにと、竹とんぼ作り・しめ縄作り・どろんこ競走・子ども相撲などのアイデアを準備している。</p> <p>また、参加者の心のふるさととして接し、農業体験を通して実りの秋と収穫の喜びが実感できるように設定されている。</p>	<p>体験農業を始めた頃、全国的にも類似イベントはまだ少なく、新聞・テレビ等で報じられると県内外から大きな反響を呼び、以後、村を代表するイベントとなった。</p> <p>増加した来村者の要望に応える形で、平成3年度に「特産物センター」(平成10年度に新装オープン)、平成4年度には農村体験型研修宿泊施設「自然学習村「源じいの森」」がオープンした。平成10年度には「源じいの森温泉」が加わり、観光入り込み客数も80万人(平成11年度推計)を数えた。これらの施設により、多くの住民の雇用が増加し、赤村で採れた農産物の売上が伸びるなど、波及効果が広がりを見せている。</p> <p>平成5年度国土庁「全国農村アメニティコンクール」優良賞、平成7年度自治省「うらおいと活力あるまちづくり」、自治大臣表彰、平成9年度西日本新聞社「元気が出る地域づくり県民意識調査」元気度1位と、各種の表彰を受けた。</p>	<p>高齢化・過疎化が進行し、農地の荒廃が目立ってきたが、遊休農地の有効利用と集落の活性化を目指して平成5年度に後山地区で「後山農用地利用組合」を設立し、平成7年度には見取地区に「見取農用地利用組合」を設立し、地区主催の「DO YOU 農?」を始めた。今日では、村主催と地区主催とを合わせて年間に計6回の農業体験が実施されている。</p> <p>農家でありながら農業を知らない子どもが増加している。以前、農業は手作業中心の仕事で、子どもも家族の一員として農作業を手伝っていたが、現在は農業も機械化が進み、農作業の手伝いをせずに済むようになった。当初は都市住民に対してのテーマであったが、現在では、田舎にいても農業を知らない子ども達に対してのテーマにもなっている。</p>	<p>平成12年現在、「DO YOU 農?」を取り巻く状況は当初とは大きく変わり、他の市町村や団体でもアイデアを凝らした農業体験イベントが開催されている。「DO YOU 農?」をこれからも大きく発展させていくために、さまざまな角度から検証しなければならない。たとえば「田舎でも農業を知らない子ども達」への対応策として、村の小学生も平成10年度から「DO YOU 農?」に参加してもらっており、都市に住む子ども達との交流を兼ねて農業体験を楽しんでいる。この例のように今後は、これからの時代に淘汰されないよう新しい時代に合致したイベントとして発展させていきたい。まずは、決められた時間の中でマンネリ化せず、参加者が楽しめるように工夫することである。そして、楽しむだけでなく農業体験を通して稲作への理解を深め、都市と農村との相互交流を促し、最終的に村の活性化に結び付けることが今後の目標である。</p>
<p>鹿児島県知覧町 知覧町体験学習型観光事業 :0993-83-2511</p>	<p>古くから「薩摩の小京都」と呼ばれ、多くの観光客が訪れていたが、近年の景気低迷に加え、旅行形態が「安・近・短」傾向へと変化しており、観光客数は平成9年以降年々減少傾向にある。</p> <p>今後の観光振興対策として、既存の観光資源・施設に頼るだけでなく、参加・体験・学習など、最近の観光客の多様なニーズに対応した観光拠点づくりとして、平成10年度から体験学習型観光事業(お茶摘み、芋掘り体験)に取り組んだ。</p>	<p>観光の町である一方、農業が主要産業である。「知覧茶」とさつまいも「知覧紅」の2つの特産品を活かした農業体験学習(お茶摘み、芋掘り体験)を実施し、農業体験を通して、都会にはない「田舎の「自然とのふれあい」「収穫の喜び」を味わってもらい、直接、作物に触れることで、子供たちに食べ物の大切さ、農業の重要性を学んでもらう。</p>	<p>お茶摘み体験については県外の中学校、高校の修学旅行生がほとんどで、芋掘り体験については修学旅行の他に、鹿児島市内の家族(子ども連れ)の利用が多い。修学旅行等では、茶工場の見学、茶についての説明等も行われ、勉強になっているとのことである。また、都会の子ども連れの家族については外で土にふれあう機会が少なく、なっていることもあり、非常にいい経験ができたことと喜ばれている。お茶とさつまいもはお土産に持って帰ってもらい、特産品のPRにもなっている。</p>	<p>お茶摘み体験については、企業(西垂水茶業有限会社)に委託しており、学校関係や団体旅行客への対応は可能であるが、少人数の場合の対応が難しい。</p> <p>芋掘り体験については、さつまいもの管理のみを農家に委託しており、当日の対応は事務局(町役場観光課)が行っているため、専門的な説明ができない。</p> <p>一般参加者がまだ少ないので、今後どのようにPR、募集していくかが課題である。</p>	<p>現在はお茶摘みとさつまいも掘りだけを実施しているが、今後は稲刈りやみかん狩り、イチゴ狩り等、いろいろな体験を年間を通じて行うことができると考えている。農業体験学習がきっかけで、知覧町のよさを感じてもらい、知覧に定住してくれる人が一人でも増えてくれば、地域活性化につながるのではないかとと思われる。</p>

# 事例) 小貝川プロジェクト21 (後藤氏・向田氏の視察)

名称	特定非営利活動法人小貝川プロジェクトニー
事務所	茨城県北相馬郡藤代町柵木49番地
設立	平成14年4月2日
目的	<p>この法人は、小貝川の自然環境の中で、水・陸・空の三次元を活用し、大人も子供も、高齢者も障害者も、時間と場所を共有し、思いっきり遊び、学び、交流する為の「ふじしろ・三次元プロジェクト」を中心に、福祉・教育・環境といった分野の事業を展開することにより、人々の相互理解と、生活の質の向上に寄与する事を目的とする。</p> <p>この法人は、上記の目的を達成する為、次に掲げる特定非営利活動を行う。</p> <p>保険、医療又は福祉の増進を図る活動                  社会教育の推進を図る活動                  文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動                  子どもの健全育成を図る活動</p>

## 小貝川ポニー牧場



ポニー教室



シニア乗馬教室



要介護者乗馬



障害者乗馬



牧場体験



外馬

## 藤代町の位置



## 川に親しむ事業



川の総合学習支援



小貝川土曜学校



子ども水辺安全講座



川あそび

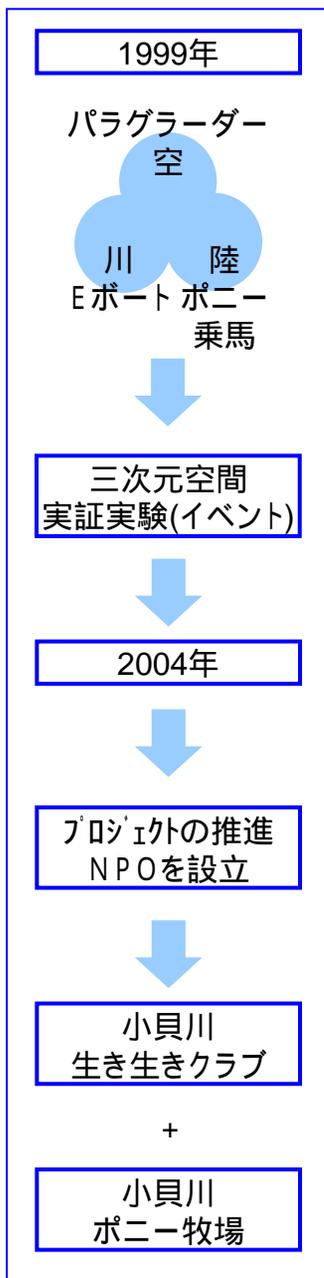


川の指導者養成講座

## その他事業

- マウンテンバイク
- 小貝川生き生きクラブ
- 地域子ども教室
- パソコン教室
- 川の拠点づくり応援

# 事例)小貝川プロジェクト21(後藤氏・向田氏の視察)



## プロジェクトの特色

### 拠点づくり

活動の拠点づくり(教育・福祉活動の常設化)

- ・事業を継続的にできる体制を整える
- ・来訪者に対応するスタッフ
- ・ボランティアが参加しやすい雰囲気
- ・公共施設(学校の空き教室、地区公民館)
- ・公共施設を利用する場合は  
地域住民・利用者・活動者相互の信頼感  
総合学習、生涯学習、野外活動などのしやすさ

### 人材育成

Eポート・カヌー・川遊び・魚とり・キャンプ等の野外活動の技術と指導力をもった指導者  
事業の企画、調整と申請、広報、案内等の企画力をもった事務局員  
これらに加え、ボランティアスタッフ

教育カリキュラムとしては  
A:川に学ぶ体験活動の理念 B:川の自然の理解  
C:川と人、社会、文化の関わり D:安全対策 など

### 組織連携

河川を管理する国土交通省・地方自治体  
NPO小貝川プロジェクト21  
川に学ぶ体験活動協議会  
財団法人ハーモニーセンター  
が連携してプログラムを実施  
プログラムの多様化と事業の拡大に対応  
さまざまなプログラムに対応できる人材の確保  
よりも、各種団体と連携する

### 多様な主体

・NPO小貝川プロジェクト21  
・小貝川ポニー牧場を運営する  
青少年育成団体  
・財団法人ハーモニーセンター  
の3団体が  
藤代町の高齢福祉施設  
「小貝川生き生きクラブ」を  
活動の拠点としている

### プログラムとフィールド

【プログラム】

- ・ポニー教室
- ・小貝川夢乗馬
- ・要介護者乗馬
- ・カヌー教室
- ・Eポート教室
- ・子ども水辺安全講座
- ・川あそび
- ・小貝川自然教室
- ・マウンテンバイク教室
- ・小貝川生き生きクラブ
- ・地域子ども教室
- ・パソコン教室
- ・川の拠点づくり応援

【フィールド】

- ・小貝川ポニー牧場
- ・小貝川河川敷
- ・子どもの水辺藤代町総合公園
- ・マウンテンバイクコース